

# 「北海道の基礎を築いた指導者たち」

<第1冊>

北海道マサチューセッツ協会 「HOMAS」 ニューズレター 掲載記事 他

北海道開拓使時代の指導者たちの具体的な人物像とその業績を、各種の資料調査をもとに簡潔にまとめたものです。 (執筆担当 中垣 正史)

- ① 開拓使顧問ホーレス・ケプロンと開拓次官黒田清隆 (NO. 43) 2004, 12, 10 発行
- ② 札幌村の開祖大友亀太郎と日本畜産の指導者エドウィン・ダン (NO. 44) 2005, 3, 17 発行  
(付) 資料: 札幌村の開祖 大友亀太郎を記念するもの  
(付) 資料: 畜産の指導者 エドウィン・ダンを記念するもの
- \* 提言紹介 札幌に「ホーレス・ケプロン通り」を (NO. 44) 2005, 3, 17 発行
- \* 「ホーレス・ケプロン通り」道民フォーラムのご案内 (NO. 45) 2005, 7, 26 発行
- ③ 日本の天才級の人材を輩出させたウィリアム・ホィーラー (NO. 45) 2005, 7, 26 発行  
(付) 資料: 札幌農学校の基礎を築いた ウィリアム・S・クラークを記念するもの
- ④ 多くの製造実験を行ったペンハローと北海道農法の基礎を築いたブルックス (NO. 46) 2005, 12, 15 発行
- ⑤ 本道の病院施設の充実や治療法の指導に尽力したカッター  
<外国人教師 10 名全員の氏名列挙> (NO. 47) 2006, 3, 17 発行
- \* 第 2 回「ホーレス・ケプロン通り」道民フォーラムのご案内 (NO. 48) 2006, 7, 31 発行
- \* クラーク博士来道 130 周年と曾孫スチュー・クラーク氏ご夫妻 (NO. 48) 2006, 7, 31 発行
- ⑥ 真駒内を拓いたダンの牧牛場とモーテン・ラーセンの有畜農業  
<エドウィン・ダン来札 130 周年> (NO. 49) 2006, 12, 1 発行
- \* 日本最初の米国人英語教師ラナルド・マクドナルド (NO. 50) 2007, 3, 26 発行
- ⑦ 地質測量・鉱床調査のベンジャミン・S・ライマン (NO. 51) 2007, 7, 26 発行
- \* 「ホーレス・ケプロン通り」愛称付与運動の意義 (NO. 51) 2007, 7, 26 発行
- ⑧ 北海道近代の黎明…松前藩から北海道へ  
<高田屋嘉兵衛の活躍を中心に> (NO. 52) 2007, 12, 1 発行
- ⑨ 十勝開拓のパイオニア…依田勉三の苦闘の生涯 (NO. 53) 2008, 3, 17 発行
- \* 資料: 北海道庁が招聘した北欧の外人模範農家 (NO. 54) 2008, 7, 26 発行
- ⑩ 屯田兵育ての親…北海道を愛した永山武四郎の生涯 (NO. 55) 2008, 12, 10 発行

## 開拓使顧問ホーレス・ケブロンと開拓次官黒田清隆 —ホーレス・ケブロン生誕 200 年記念に寄せて—

北海道近代の開拓の歴史はきわめて急テンポの展開であり、しかも奇しくも、北海道とマサチューセッツ州の国際交流の出発点ともなるものでありました。

明治 2 年(1869) 7 月、明治政府の開拓使設置(初代開拓長官<明 2, 7, 13—2, 8, 25>鍋島直正)にはじまります。同年 8 月蝦夷地を北海道と改称、第二代長官<明 2, 8, 25—4, 10, 15>東久世通禧が 9 月函館開拓使出張所設置により来道。同年 10 月(旧曆) 銭函仮役所<明 2, 10—3, 4>を設置、島義勇判官<明 2, 7, 22—明 3, 3, 2>が初代主任官となり札幌の本府建設に着手することとなります。島義勇は、開拓 3 神を奉じて札幌着任の後、旧曆明治 2 年 11 月 12 日・13 日(12 月 13 日・14 日)に「コタンベツの丘」(円山、三角山?)に登り本府建設 100 年の大計を構想したといわれます。その後、島義勇は東久世長官との意見対立により明治 3 年 3 月 2 日付で東京召還。それを受けて岩村通俊判官が第二代主任官となり、京都を模した札幌建設を進めました。<明 4, 10—明 7, 10>は長官不在により、岩村通俊が長官執務。(岩村通俊は、後に明治 19 年(1886) 初代北海道庁長官となります。)

明治 3 年(1870) 5 月、黒田清隆が開拓次官となります。彼は、明治 7 年(1874) 8 月には、第三代開拓使長官となり開拓使廃止直前<最後の開拓長官西郷従道は、明 15, 1, 11—15, 2, 8 の短期在任>の明治 15 年(1882) 1 月まで、本道行政の直接の責任者として活躍し、北海道の開拓の基礎を築いた最大の功労者といえます。アメリカ農務省長官のホーレス・ケブロンをはじめ、鉱山技師ベンジャミン・S・ライマン、農学校教頭ウィリアム・S・クラーク、畜産の父エドウィン・ダンなど 78 人の外国人(そのうちアメリカ人 48 人)を招いて北海道開拓に欧米の先進技術を導入したのも彼の高い識見によるものでした。

明治 4 年(1871) 1 月、開拓次官黒田清隆は、米国に渡り、グラント大統領に開拓使顧問の招聘を依頼して、同年 3 月アメリカ農務省長官ホーレス・ケブロン(1804—1885、当時 67 歳)の顧問契約を成立させました。同年 7 月にケブロンは秘書エルドリッジ、科学技術師アンチセル、土木技師ワーフィールドを伴って来日しました。以後、約 4 年間、アンチセル、ワーフィールドの開拓予備調査、その後のケブロン自身の 3 回にわたる道内各地の視察・調査を通してまとめられた「ケブロン報告書」(①明治 4 年(1871) 11 月、②明治 6 年(1873) 11 月、③明治 8 年(1875) 3 月)、さらに離日に際して、開拓使に提出した「報文要略」は、その後の北海道開拓の重要な指針となるものであったといわれます。いわば、北海道近代化の指導者が米国マサチューセッツ州出身のホーレス・ケブロンであったことは不思議な歴史の原点といえます。

今年 2004 年は、ホーレス・ケブロンの生誕 200 年にあたり、去る 11 月 27 日(土)道庁赤レンガ庁舎において「ホーレス・ケブロン生誕 200 年記念の集い」(実行委員長、有江幹男元北海道大学学長・北海道日米協会会長・北海道・マサチューセッツ協会名誉会長)が開催されました。

## 札幌村の開祖 大友亀太郎と日本畜産の指導者エドウィン・ダン —ダンの指導を受けた町村金弥、そして「町村農場」を創設した町村敬貴—

江戸幕府は、蝦夷地警備のために安政元年(1854)箱館奉行所を設置しました。そして、内陸部開拓のために、二宮尊徳(1787~1856、江戸後期の農政家)一門に協力を要請しますが、安政5年(1858)になって、報徳思想を体得した門下生の「大友亀太郎」(1834~1897、当時25歳)が、幕府の命令により蝦夷地に渡ることとなりました。

大友亀太郎は、箱館奉行から開墾場取扱いの辞令を受けて、苦勞の末原野を切り開き、道路を作り、用水路を掘って、木古内・大野村・次いで七飯に御手作場(おてさくば・開拓農場)を開設しました。(明治元年(1868)7月、箱館府の99年間租借地契約による、ガルトネル七重村開墾農場は、開拓使が交渉を重ね、明治3年(1870)12月、明治政府が莫大な賠償金を支払って取り戻しますが、彼の西洋式農業紹介の功績は大きいといわれています。)

この開墾農場開設の業績が高く評価されて、大友亀太郎は、慶応2年(1866、当時32歳)、蝦夷地開墾掛を命ぜられ、石狩開墾に関する計画書を提出して、4月23日高木長蔵ら数名とともに石狩に入りました。早山清太郎を案内役として御手作場(おてさくば・開拓農場)をサホロベツ(アイヌ語で大きな乾いた広い土地という意味)と決定して、伏古川のほとりで開拓に着手したのでした。(これが「札幌村」の原点となりました。)

当時、大友亀太郎より先に、寒寒には山岡精次郎、篠路には荒井金助、早山清太郎、豊平川両岸には志村鉄一、吉田茂八らが入植していたといわれます。大友亀太郎は、田畑の開墾に先立って、資本を導入して、石狩などから多くの人夫を集めて、豊平川支流から水を引いて、北に水路を掘り進め、現在の南3条から北6条までは直線(現在の創成川)、そこから東北に曲って北13条東16丁目のところで伏古川に合流するという用水路の大工事を、慶応2年(1866)5月から始めて、同年9月9日に完成・通水させたといわれます。

<これが「大友堀」といわれるもので、堀の大きさは長さ約4km、深さ約1.5m、上幅約1.8m、下幅1.2mという大規模工事で、毎日40~50人の人夫が働く「一万両の大工事」といわれるものでした。完成した「大友堀」は、用水路、運送路として、多目的に利用されましたが、大正14年(1925)ごろ北6条から伏古川の間は埋めたてられました。後に、札幌から茨戸までの「寺尾秀次郎堀」と結ばれて、一直線の川筋として今日に至っています。>

さらに道路や橋なども作り、翌慶応3年(1867)4月、箱館近郊から20戸70余人の入植者を迎えて、田畑を開墾し、その年の秋には若干の米も収穫したといわれます。こうして、大友亀太郎は、明治以後の札幌開拓の先駆的な役割を果たしたのでした。(後に、札幌官園のエドウィン・ダンなどの指導で各種作物が栽培されます。)

大友亀太郎は、明治元年(1868)7月箱館裁判所付属となります。12月石狩当別の土地調査・移民受入れに着手。明治2年(1869)8月、苗穂村を開墾しますが、この年の12月に、元村・苗穂の開墾地を開拓使に引き渡して、翌明治3年(1870)1月、新しく拝命した開拓使掌を辞して苦難の開拓12年の北海道を去りました。その後の大友亀太郎は、茨城県・島根県・山梨県の大要職を経て、明治7年(1874)故郷神奈川県に帰り、戸長などを務めて、明治14年(1881)県会議員に当選、以後4期連続当選。明治30年(1897)12月14日没。(64歳の生涯でした。)

さて明治2年(1869)7月、明治政府の開拓使設置により、北海道の本格的な開拓がスタートしますが、明治3年(1870)5月、開拓次官となった黒田清隆は、北海道の開拓や農業経営の模範を米国に求め、マサチューセッツ州出身の、米国農務長官ホーレス・ケプロン(1804-1885、当時67歳)を開拓使顧問として招聘しました。<この経緯は「HOMAS」No.43に詳述> 明治4年(1871)7月来日したケプロンの指導で、早速、東京の青山・麻布に官園が設けられ、北海道に導入する作物の試作・家畜の飼育や農業技術者の養成が行なわれたといわれます。また、道内各地の視察・調査にも来ています。

明治6年(1873年)7月には、オハイオ州で牧場経営をしていたエドウィン・ダン(1848～1931)は、A・B・ケプロン(ホーレス・ケプロンの息子)の依頼を受けて、米国の進んだ畜産技術指導のために、牛20頭・羊100頭とともに大陸横断の苦難の末来日しました。早速、東京麻布の第3官園で約30人の生徒に実技指導を行うことになりました。そして、北海道開拓に役立つ技術者養成のために実技を主体にした畑作や畜産の技術を幅広く指導したといわれます。明治8年(1875)5月、エドウィン・ダンは、北海道七重(現在の七飯)官園に、5ヶ月の長期出張で来て、農業技術や馬の改良に欠かせない去勢技術の普及に努めました。この期間中、札幌官園、新冠牧場も視察しました。また七重では「妻となるべき女性」ツルとの出会いがありました。後に、国際結婚の難しい手続きを経て、正式に結婚。日本永住の決意を固めたのでした。

明治9年(1876)6月、エドウィン・ダンは、園芸担当のポーマーと共に札幌官園に転勤し、直ちに真駒内牧牛場の建設に着手、搾乳場・乳製品加工場・用水路など、牧場の施設が整備されていきました。この年7月31日、マサチューセッツ州立農科大学学長ウィリアム・S・クラークが、ウィリアム・ホイラー、ディビッド・ベンハローとともに札幌着任。8月14日、札幌農業校開校となります。これに伴い札幌官園の大半が農学校の農場となったこともあり、エドウィン・ダンも、彼等と協力して、明治10年(1877)我が国最初の模範家畜房(モデルバーク)を建築しました。これは、今日も北大構内に、重要文化財として保存されています。

明治11年(1878)、エドウィン・ダンの提言により新冠牧馬場が整備され、馬産王国北海道の基礎ができたのでした。馬の改良と増殖が進められ、開拓使が米国農法を模範として、馬を使用する農機具の導入を図ったこともあり、馬による大型機械が普及して、北海道の大規模農業の発展に大きく貢献しました。また、ビール製造用の大麦・小麦・亜麻の栽培等、暗渠排水による土地改良なども、エドウィン・ダンの指導によるところ大であったといわれます。(今日も、多くの農機具は、プラウ・ハロー・ホークなど英語名で呼ばれています。)

明治15年(1882)1月、開拓使の廃止により真駒内牧牛場は農商務省の所管となりますが、この年、札幌農学校2期生の「町村金弥」(1859-1944)が真駒内牧牛場に勤務して、短期間ではありましたが、エドウィン・ダンの直接指導を受けたのでした。エドウィン・ダンは、この年12月、6年半にわたる北海道滞在に多くの業績を残して、東京に移りました。さて、その後のエドウィン・ダンは、明治16年(1883)、長年にわたる北海道農業・畜産指導の功績により勲五等旭日双光章を受章しています。米国オハイオ州に一時帰国しますが、明治17年(1884)、駐日米国公使館の二等書記官として再来日。明治30年(1897)まで、外交官として勤務。後明治33年(1900)石油採掘事業を起こし、大正元年(1912)三菱会社勤務。昭和6年(1931)5月15日、東京代々木の自宅で永眠しました。(享年82歳)

明治15年(1882)12月エドウィン・ダンが去った後、町村金弥が真駒内牧牛場運営の任にあたりました。その薫陶を受けた長男「町村敬貴」(ひろたか)(1882-1969)が、札幌農学校卒業後、米国に渡りウイスコンシン州の牧場で酪農実習、その間農業大学卒業、10年間に及ぶ酪農技術実習を体得して帰国します。そして、大正16年(1917)、石狩市樽川に入植し町村農場を創設しました。

さらに、昭和2年(1927)現在地の江別対雁(ついしかり)に移転して、総合的・科学的土地改良の実践による酪農経営にあたり、酪農王国北海道の基盤を確立したといわれます。町村敬貴氏は、昭和24年(1969)、没、享年86歳でした。(なお、元北海道知事町村金五氏は実弟、現外務大臣の町村信孝氏は甥にあたります。)

**札幌村の開祖** **大友 亀太郎(1834~1897)を記念するもの**

① **「大友亀太郎像」(札幌市中央区北2条西1丁目)**

昭和61年(1986)5月、農民彫刻家松田与一氏制作による「大友亀太郎像」が、昔、「大友掘」と呼ばれた創世川沿に建てられています。詳しい歴史説明の石版もあります。

② **「札幌村郷土記念館」(札幌市東区北13条東16丁目2-6)**

昭和52年(1979)4月、地域の人々によって、大友亀太郎の札幌開拓の先駆的事業に関する資料、わが国の「玉ねぎ」栽培の先進地としての歴史的資料などを保存する資料館として開設されました。

昭和62年(1987)2月札幌市有形文化財指定。記念館の敷地は、大友亀太郎役宅跡として史跡に指定されています。入館無料・10時~16時。(月曜日と祝日の翌日、年末年始は休館です)

③ **「大友公園」(札幌市東区北13条東16丁目3)**

昭和42年(1967)、札幌市が土地区画整理事業により、この地に公園を設置しました。

その際、厳しい北国の自然と闘い、遠大な理想をもって開拓を進めた先人の偉業を偲ぶ記念公園として、「大友公園」と名付けられました。当時の歴史再発見の広場となっています。詳しい歴史説明板があります。

**畜産の指導者** **エドウィン・ダン(1848~1931)を記念するもの**

① **「エドウィン・ダン像」(七飯町庁舎内)(札幌市南区真駒内泉町1-6 真駒内中央公園内)**

この「エドウィン・ダン像」は、彫刻家・峯 孝氏の制作で、昭和39年に建てられたものですが、明治初期に、ダンが畜産指導にあたった七飯官園と真駒内牧牛場との両地にあります。

② **「エドウィン・ダン記念館」(札幌市南区真駒内泉町1-6 真駒内中央公園内)**

エドウィン・ダン(1848~1931)の指導により、明治9年(1876)から建設に着手、真駒内牧牛場の施設が整備されて、本格的な酪農畜産が、スタートしました。明治26年(1893)には、北海道種蓄場になり、名実ともに、北海道の家畜改良や技術普及のセンターとしての役割を果たしてきました。しかし、戦後、米軍が接収されたため、新得町に移転しました。

その後、この由緒ある建物をぜひ残したいということになり、昭和39年に、「エドウィン・ダン顕彰会」(現「ダンと町村記念事業協会」)により、現在地に移設され、関係資料を展示することになったものです。この記念館は、昭和40年から、一木万寿三画伯によるダンの生涯と業績を描いた絵画を中心に、北海道の開拓初期の写真、種蓄場の模型などを展示しており、平成12年に、国の登録有形文化財に指定されました。建物は昭和40年、札幌市に移管され運営されていましたが、老朽化のため約8,000万円をかけて本格的な改修工事を行い、平成15年5月リニューアルオープンを機に、地元住民「エドウィン・ダン記念館運営委員会」により運営されています。入館無料・9時30分~16時30分。(毎週水曜日休館・11月4日~翌4月末日は閉館です)

## 提言紹介 札幌に「ホーレス・ケプロン通り」を

—開拓使時代のメインストリート(北3条通り)をメモリアルロードにしよう—

昨年11月27日(土)、道庁赤レンガ庁舎で「ホーレス・ケプロン(1804~1885)生誕200年記念の集い」(主催同実行委員会)が開催されました。

明治政府は、明治2年(1869)7月、開拓使を設置、北海道の本格的な開拓に着手しました。そして、明治4年(1871)、黒田清隆の招きにより、開拓使顧問として来日したホーレス・ケプロンは、3年10ヶ月、日本に滞在しましたが、その間、科学技師アンチセル・土木技師ウオーフィールドの開拓予備調査、その後のケプロン自身の3度にわたる北海道の実地調査に基づく貴重な「ホーレス報文」を残しました。さらに、帰国の際して、契約を延期して「報文要略」をまとめ、開拓使に提出してから離日したのです。(後に明治17年(1884)、勲2等旭日重光章が贈られています。)「報文」は、北海道の開発計画を提案し、札幌を首都とすること、農業のために高等教育機関を設置することなどを明治政府に進言しています。このケプロンの進言により、マサチューセッツ農科大学学長ウィリアム・S・クラークを第一任教頭(学長)に迎えて札幌農学校が開設(明9.8.14)されています。第二任教頭となったのは、クラーク博士に随行して来道したウィリアム・ホイラーでした。

ケプロンの提言は、その後の北海道開拓の基礎的事業に関するものと同時に、開発すべき諸産業の振興に関するものであり、その助言と示唆は、北海道の開拓・開発に対する重要な指針となるものであったといわれます。

「ホーレス・ケプロン生誕200年記念の集い」は、このケプロンの偉大な業績を讃えるための道民有志の集まりとなりました。その後、提唱者の佐々木晴美氏(社)北海道開発技術センター顧問)を代表として、広く「道民有志グループ」の運動として「ホーレス・ケプロン通り」設置の気運が高まっています。

その趣旨は、北海道の近代化に向けた開発の原点となった、ホーレス・ケプロンの業績を永く将来に顕彰するために、かつて「開拓使通り」と呼ばれた札幌市中央区北3条通りのうち、道庁赤レンガ庁舎前から永山武四郎邸(北2東6)までの区間(約1キロ)を「ホーレス・ケプロン通り」の愛称で呼ぶことを提案するものです。

この「「ホーレス・ケプロン通り」の愛称付与に関する提案書」が、平成17年2月2日付けで、道民有志グループ(代表 佐々木晴美)から、高橋はるみ北海道知事、上田文雄札幌市長宛に提出されています。

賛同者として、北海道日米協会会長江幹男氏、北海道・マサチューセッツ協会会長森本正夫氏、後援機関として、在札幌米国総領事館総領事マリー・シェーファー氏、後援者として衆議院議員町村信孝氏の名前も連記されています。なお、当協会としましても、この運動を支援し、その実現に努めて参りたいと思います。

## 「ホーレス・ケプロン通り」道民フォーラムのご案内

—8月27日(土)13:00~16:00・道庁赤れんが庁舎(2F)—

明治4年(1871)、黒田清隆の招きにより、開拓使顧問として来日したホーレス・ケプロン(1804~1885)は、3年10ヶ月、日本に滞在しましたが、北海道の実地調査に基づく貴重な「ホーレス報文」を残しました。「報文」は、北海道の開発計画を提案し、札幌を首都とすること、農業のために高等教育機関を設置することなどを明治政府に進言しています。このケプロンの進言により、マサチューセッツ農科大学学長ウィリアム・S・クラークを初任教頭に迎えて札幌農学校が開設(明9. 8. 14)されています。ケプロンの提言は、その後の北海道開拓の基礎的事業に関するものであると同時に、開発すべき諸産業の振興に関するものであり、その助言と示唆は、北海道の開拓・開発に対する重要な指針となるものであったといわれます。

このケプロンの偉大な業績を讃えるため昨年11月27日(土)、道庁赤レンガ庁舎で「ホーレス・ケプロン生誕200年記念の集い」(主催同実行委員会)が開催されました。その後、提唱者の佐々木晴美氏(社)北海道開発技術センター創設者)を中心とする「道民有志グループ」の運動として「ホーレス・ケプロン通り」設置の気運が高まりました。そして、「「ホーレス・ケプロン通り」の愛称付与に関する提案書」が、すでに、高橋はるみ北海道知事・上田文雄札幌市長に提出されて、賛同をいただいております。

この度、実行委員会(委員長、森本正夫北海道・マサチューセッツ協会会長)を組織して、第1回「「ホーレス・ケプロン通り」愛称付与推進道民フォーラム」開催の運びとなりました。その趣旨は、北海道近代化の開発の原点となった、ホーレス・ケプロンの業績を永く将来に顕彰するために、かつて「開拓使通り」と呼ばれた札幌市中央区北3条通りのうち、道庁赤レンガ庁舎前から永山武四郎邸(北2東6)までの区間(約1キロ)を「ホーレス・ケプロン通り」の愛称で呼ぶことを提案するものです。

当協会としましても、北海道・マサチューセッツ州姉妹提携15周年記念事業の一環として、マサチューセッツ州から明治期の北海道に注がれたケプロン、クラーク人脈の偉大な功績に思いを致し、この運動を推進しその実現に努めて参りたいと思いますので、ぜひ、多数の方のご参加をお願いいたします。

### 第1回「「ホーレス・ケプロン通り」愛称付与推進道民フォーラム」ご案内

日 時	2005年8月27日(土)13:30~16:10
会 場	道庁赤れんが庁舎会議室(2階) (参加費無料)
主 催	「ホーレス・ケプロン通り」愛称付与推進実行委員会 (愛称付与推進道民有志グループ、北海道日米協会、北海道・マサチューセッツ協会)
後 援	在札幌米国総領事館、北海道、札幌市など
プログラム	13:30—13:50 実行委員長あいさつ・在札幌米国総領事館総領事あいさつ メッセージ紹介(北海道知事、札幌市長) 13:50—14:10 室内楽演奏 (休憩15分間) 14:25—15:15 お話(1)お話(2) <15:15—15:30 質疑> 15:30—15:40 総括・アピールティーパーティー(15:40—16:10 会場で)

事前申込み(8月18日(木)まで)参加ご希望の方は、北海道・マサチューセッツ協会事務局(TEL 011-231-3392 FAX 011-231-3666) 「氏名・住所・電話番号・FAX番号」明記の上、に電話又はFAXでお申込みください。

## 日本の天才級の人材を輩出させた“ウィリアム・ホイラー” —札幌時計台設計者・優秀な土木技師の札幌農学校第2代教頭—

明治9年(1876)7月31日、開拓使長官黒田清隆の招きにより、マサチューセッツ州立農科大学長ウィリアム・S・クラーク(1826—1886 当時50歳)は、優秀な教え子のウィリアム・ホイラー(1851—1932、当時25歳)、デヴィッド・P・ベンハロー(1851—1932 当時22歳)とともに来札しました。クラーク博士が、札幌農学校(明治9年8月14日開校)の初代教頭(学長)として着任し、翌10年4月16日離札までの約8ヶ月間、すぐれた経営とキリスト教精神による教育指導を行なった功績はよく知られています。そして、「ボーイズビーアンビシャス」に象徴される高邁なクラーク精神は今日でもこの北の大地にしっかりと根付いているのです。しかし、クラーク博士とともに来札した優秀な教え子たち、第2代教頭となったウィリアム・ホイラー(滞在約3年)、そして第3代教頭となったデヴィッド・P・ベンハロー(滞在約4年間)のことや、さらに、一足おくれて明治10年(1877)2月来札し、のちに第4代教頭となったウィリアム・P・ブルックス(当時26歳)(滞在10年余)などのことについては、あまり広く知られていないと思います。

それで、今回は、あのクラーク博士の大きな存在の陰にかくれがちな、ウィリアム・ホイラーの北海道近代化における業績について取り上げてみたいと思います。…札幌農学校2期生から、広井勇、内村鑑三、新渡戸稲造、宮部金吾、南鷹次郎、佐久間信恭らの「天才級」の人材を多く輩出したのは、実にその指導者であった青年教師ウィリアム・ホイラーの“天才性”とその人格的魅力によるものである。…と「お雇いアメリカ人青年教師ウィリアム・ホイラー」の著者、高橋哲朗氏は力説されています。

ホイラーは、1851年、マサチューセッツ州コンコードの生まれ。地元コンコードハイスクールに無試験で入学するほどの秀才で、高校も成績優秀でした。1867年、16歳でアマーストに創設されたマサチューセッツ州立農科大学(1867年10月2日開校、初代学長ウィリアム・S・クラーク)に入学します。彼は、1期生27名中最年少の16歳。学生寮での共同生活の中で、学長クラークの薫陶を受けて、実践的学問観や「自立の人」を尊ぶ人生観を身につけたといわれます。

1871年、27名中、2番の成績で卒業します。卒業後の約5年間、ホイラーは、優秀な土木技術師として、鉄道建設の設計施工の仕事、上水道敷設のためのサンディ・ポンドからの人口水路の設計施工、コンコード川、チャールズ川のアーチ型の石橋など、マ州内の多くの公益事業の設計や施工を手がけ、その成功によって才能が高く評価されていました。

そして、明治9年(1876)7月31日、クラーク博士・ホイラー・ベンハローの3人が札幌入りした時、ホイラーは25歳でした。彼には婚約者がいましたが、家族の賛成を得て日本行きを決めました。また、日本赴任に際して、彼が崇拜していたコンコードの哲人ラルフ・エマーソンの推薦文も得て着任したのでした。

ホイラーの札幌滞在は、実に多忙をきわめたものでした。まず、9月1日札幌に気象観測所設置。後の石狩川沿岸・幌向・対雁・茨戸石狩(11年8月)・留萌(11年9月)・根室(12年7月)などの観測所設置もすべてホイラーの勧告によるものといわれます。クラーク教頭と馬に乗ってコネチカット川によく似た石狩川や琴似川・篠路川・茨戸川の河川調査など道内各地へ調査出張に出かけています。また、開拓使の依頼により札幌～小樽間・札幌～室蘭間などの実地測量と設計に基づき鉄道敷設を進言したりしています。彼が手がけた土木建築事業は少なくありません。



クラーク博士の明治10年(1877)4月16日離札後、ホイーラーが、第2教頭として札幌農学校運営の実績や前途有益な青年たちにあたえた人格的・教育的な感化力はクラークに優るとも劣らないものでありました。学生の信望も厚くニックネームは山羊先生(ミスターゴート)と呼ばれていました。農学校の書庫・講堂・温室などの諸施設の増設。特に、アメリカ開拓時代をしのばせるコロニアル様式の「演武場」(1878年(明11)9月完成・10月16日落成式)もホイーラーの前身。明治14年(1881)8月12日からときを刻み始めて今日に至っています。

また、牛馬や牧草・農機具を収容できる三層づくりの巨大な「モデル・バーン(模範畜舎)」の設計・施工者もホイーラーです。「時計台」・「モデル・バーン(模範畜舎)」(北大構内)はいずれも、今日国指定重要文化財として保存されています。…明治11年(1873)3月一時帰国、コンコードにて7月17日婚約者ファニーと結婚、8月妻ファニーと再来日。…札幌農学校のカリキュラムは、初代教頭クラークとホイーラーによって編成され、マ州立農科大学の知育・徳育・体育を骨格とした前人教育が実践されたといわれます。こうして、クラークによってその基礎が築かれた札幌農学校はここにほぼ体裁を整えて、日本の代表的な高等教育機関の一つに成長したのです。

約3年半滞在後、ホイーラー(28歳)は、明治12年妻ファニーとともに米国へ帰国しました。日本からの長旅の末明治13年(1880)3月、帰国したホイーラー夫妻は、郷里コンコードで盛大な帰国歓迎式典も開催され、地元紙「コンコード・ジャーナル」では、郷土の誇り「英雄」扱いでありました。帰国後、ホイーラーは、専門の仕事のほか、マ州立農科大学の運営理事、コンコードの教育委員長・図書館協会会長などの要職をいずれも無報酬で務めています。彼はコンコードの「第1級市民」(foremost citizen)と評されました。ポストンに土木工学の建設事務所を開設。東部諸州の上下水道工事の権威者としてめざましい活動をしています。

ホイーラーは、コンコードの二階建ての自宅を札幌時代(3年半)の思い出に因んで MARUYAMA-KAN(円山館)(The Round Hill House)と名付け、日本からの教え子たちの訪問を心から歓迎したといわれます。その後、大正13年(1924)73歳の時、日本政府から「勲五等朝日章」(皇太子ご成婚記念)を授与されたといわれます。老後の彼は、1932年(昭和7年)7月1日80歳で逝去するまでこの地に住んでいます。夫人は子どももなく、夫の死後もこの邸宅に住んで、1942年(昭和17年)4月18日88歳で逝去しました。夫妻のお墓はコンコード郊外の高台スリーピーホロー墓地にあります。現在、マサチューセッツ州立大学アマースト校キャンパスには、「学生寮」(ホイーラーハウス)(1960年・昭和35年10月完成)があります。

(資料)

**札幌農学校の基礎を築いた ウィリアム・S・クラーク(1826~1886)を記念するもの**

①「クラーク胸像(北大構内)」(札幌市北区北9条西7丁目)

ウィリアム・S・クラーク博士(1826-1886)は、開拓使長官黒田清隆の招きにより、明治9年(1876)6月、ペンハロー、ホイラーの二教師とともに来日、7月31日(50歳の誕生日)、札幌へ赴任しました。

翌年4月までの8ヶ月半北海道開拓の人材育成のために開設された札幌農学校初代教頭として、経営・指導に尽力、そのキリスト教精神による人間教育は多くの学生に深い感銘を与えました。

このクラーク像は、大正15年(1926)、北大創基50周年記念事業の一環として寄付金により建立。田嶋碩郎(たじませきろう)作。

後に「小学国語読本」(昭8~昭13)にも載り、彼の言葉とともに全国的に有名になったのです。太平洋戦争中、金属献納で錆潰されましたが、昭和23年再建。また、昭和34年(1969)、「クラーク会館」が北大創基80周年(1966)事業の一環として建設されました。わが国の国立大学では最初の大規模な学生会館。

杉野目学長(当時)の強力な主導により実現したといわれます。

②「クラーク記念碑(島松駅通)」(北広島市島松1番地)

明治10年(1877)4月16日、学生・教授たち全員が見送る中、島松駅通で、“Boys be ambitious!”の言葉を残して、馬にムチを当てて走り去りましたが、その高邁なクラーク精神はゆるぎないフロンティアスピリッツとして、この北の大地にしっかりと根付いています。

この地を記念して、昭和25年(1950)11月、「クラーク奨学会(発起人代表宮部金吾)」らにより、この「クラーク記念碑」が建てられました。この碑は山内壮夫によって設計製作されたもの。塔の中央部には、クラークの顔部分の彫刻と、「BOYS BE AMBITIOUS」の英文字があり、さらにその下に「青年よ大志を懐け」と彫られています。

③「丘の上クラーク像(羊ヶ丘展望台)」(札幌市豊平区羊ヶ丘1番地)

昭和48年(1973)、観光団体北大構内立入り禁止により、札幌観光協会が中心となって、北大創基100年・アメリカ建国200年・クラーク博士生誕150年記念として建立したもの。彫刻家・坂担道氏の制作によるもので、さっぽろ羊ヶ丘展望台の「丘の上のクラーク」として昭和51年(1976)4月16日(クラーク博士離道の日)に除幕式が行われました。

## 多くの製造実験を行ったペンハロー(札幌農学校第3代教頭)と 北海道農法の基礎を築いたブルックス(札幌農学校の第4代教頭)

明治9年(1876)3月3日、マサチューセッツ州立農科大学長クラーク博士は、ワシントンにおいて1年間の雇用契約(年俸7200ドル)を結び、来日を決めました。同年6月1日、サンフランシスコをグレートリパブリック号で出発、6月29日横浜到着。東京滞在後、7月25日品川沖から開拓使御用船「玄武丸」に乗り、7月30日午前10時30分小樽に到着。午後3時小樽上陸、一泊して7月31日早朝小樽を馬に乗って出発、午前10時40分札幌に到着したのです。ウイリアム・S・クラーク博士(1826-1886、当時50歳の誕生日)と優秀な教え子のウイリアム・ホイラー(1851-1932、当時25歳)、デヴィッド・P・ペンハロー(1854-1910、当時22歳)の一行3人はこうして札幌入りしたのです。ホイラーは、明治10年(1877)4月16日クラーク博士離札後、教頭代理となりますが、明治12年(1879)12月帰国しています。その後、ペンハローが教頭代理となりますが、明治13年(1880)8月妻の病気のため帰国(4年3ヶ月滞在)。少し遅れて明治10年(1877)2月に札幌にいたウイリアム・P・ブルックス(1851-1938、当時26歳)は、その後札幌で2人の子ども(道産子)も生まれ、10年7ヶ月余の札幌滞在となります。このブルックスが、明治13年(1880)8月、ペンハローのあとを引き継いで第4代の教頭代理となっています。(また、明治11年(1878)9月には、ジョン・C・カッター(1851-1909)が札幌、8年4ヶ月滞在中です。(次号で詳述します。))

「札幌農学校」は、明治9年8月14日開拓使の調所広文を校長とし、クラーク、ホイラー、ペンハローを教師陣として、本科生24人、予科生26人、合計50人の学生を迎えて開校しました。(これは、東大農学部(駒場農学校)の開校よりも1年半早く、日本最初の高等農学校といわれます。)初代教頭クラーク博士の敬虔な信仰心と高邁な理想による建学の思想と第2代教頭のウイリアム・ホイラー(年俸3,000ドル)の人格的教育的感化力の偉大については、「HOMAS」45号に詳述しましたので、今回は、デヴィット・P・ペンハロー(年俸2,500ドル)とウイリアム・P・ブルックス(年俸2,500ドル)の業績について取り上げてみたいと思います。

ペンハローは、ホイラーよりも3歳年下で、1854年5月25日メイン州キタリー・ポイント生れ。マ州立農科大学出身(3期生)で、明治9年(1876)7月、クラーク博士・ホイラーとともに札幌農学校に着任しています。植物学・化学・英語を担当しました。明治13年(1880)8月までの約4年間に在任しました。

彼は、自ら設計した化学実験室で繊維、農産物、鉱石、土壌などの成分分析や石鹸、ローソク、マッチ、皮革、コークス、魚油などの製造実験も行っています。農業においてもビート栽培などの研究に功績を残しました。いつもニヤニヤして山羊のようなあごひげをはやしていたところから、「ゴート先生」とあだ名されていました。ペンハローは、また開拓使の求めに応じて化学分析その他で多様な貢献をしています。樹脂製造調査、各地産の鉱物や土質の分析、道産の石油試験、札幌ビールや日本酒の分析、麦芽病源調査など、開拓使は農学校のような整った化学実験室や専門家をもたなかったことから、全ての化学分析はペンハローに依頼されたようです。

また、学生と植物、昆虫、動物の標本採集などのフィールドワークにも出かけています。この折の資料が、米国帰国後の学術論文に活用されているといわれます。彼は札幌農学校の仕事には、満足して、自ら進んで契約を更新し、米国に残してきた妻にも北海道に来るように手紙を出していたといわれます。明治12年(1879)12月ホイラーの帰国後は、第3代教頭代理となりますが、翌年夏明治13年(1880)8月には、妻の病気のた

め、4年3ヶ月にわたる札幌の生活に終止符を打って帰国することになります。

ペンハローは、帰国後、ニューヨーク州のホートン農業試験場の研究員になりますが、1883年閉鎖となり、その後、カナダのモントリオールのマクギル大学の植物学の講師、2年後に教授に昇進。古生物学の権威として多くの論文を発表し、後に、アメリカ博物学会・アメリカ果実栽培学会などの会長を務めています。

ペンハローは、日本人の国民性をよく理解し、日本が欧米に比べて決して後進国ではなく、むしろ優れた文化や技術をもった国であると強調しています。

1907年10月、マ州立農科大学創立40周年を記念してクラーク・ホールの落成式がおこなわれたとき、ペンハローが、クラーク博士をしのぶスピーチを述べています。主に科学的農業の発達におけるクラークの役割と「高い理想、たゆまざる努力、揺らぐことのない目的意識」を持つ人として、クラークの日本での活躍に言及して、「クラーク学長の仕事のなかで、おそらく西欧文明の最善の部分を取り入れようと努力する日本人に協力したことほど、恒久的な印象と影響力を残したものはない」とその功績を讃えています。クラークの影響力を示す強力な証拠としてペンハローがあげたものは、札幌農学校の卒業生の活躍だったといわれます。

大学での忙しい仕事をこなしながら、生物試験場の設立に多くの時間と労力を注いだペンハローは健康を害し、1910年、大学を休職、そして10月20日、リヴァプールから静養先のコーンウォールにむかう船上で、帰らぬ人となりました。享年56歳でした。友人は追悼文の中で、「疲れを知らないかのように働き、仕事に情熱を傾けた人」「なにが正直で正しいかについて強い信念を持ち、表明することを恐れない立派な人格者」そして「日本国民に熱烈な敬愛の念」を抱いていた人として、ペンハローを偲んだといわれます。

ブルックスは1851年11月19日マ州サウス・シチュエイト村の農家の生れ。11人兄弟の10番目。1875(明治8)年、マ州農科大学(5期生)卒業。クラーク博士の後任として抜擢され、少し遅れて来札。農学と農業実習を担当しクラーク博士帰国後農園長を兼務しました。そして、北海道の特産品となった丘珠タマネギや暗渠土管の紹介、とうもろこし、かぼちゃ、燕麦、キャベツ、亜麻、ビート、トマト、コーンなどの導入に努力し、家畜・農業機械・種子の輸入や土地・気候・肥料などの試験により最適の作物の選定・栽培法の検討も行うなど、学内外に多大の功績を残しています。また、北海道最初の農業雑誌の発行や最初の農業博覧会(明治11年大通り公園)も彼の提唱によるものでした。明治13年8月、第4代教頭心得となり、契約更新を重ねて、以後6年間、札幌農学校を率いたのです。ブルックスもよく日本人を理解し、相手の視点を理解しようとする寛容さと誠実さを持って努力した人でした。ブルックス夫妻と二人の子ども(道産子)は、札幌の気候と札幌の人々を愛し、市中散歩の折には、よく子どもたちに声を掛け、また「ブル先生、ブル先生」と呼ばれ、人気が高かったといわれます。

明治21年(1888)、10年余の札幌滞在の後、帰国しました。翌年母校マ州立農科大学の教授となり、また、大学付属農業試験場の運営にもあたりました。1899年、ドイツのハレ大学に留学して博士号取得後、再び母校の教授を務め、一般農民の指導にも力を入れました。かつて、北海道にアメリカの農産物を導入したブルックスは、逆に日本特有の品種をアメリカに紹介することにも感心を持ち、特に大豆の移植に成功したといわれます。1906年(明治39)からは州立の農業試験場長として農業振興に努力しました。

ブルックス家を訪れる人たちは、彼が札幌で過した歳月を象徴するかのように咲き誇るみごとな庭の桜に見とれたといわれます。大正8年(1919)、日本農学博士、1932年(昭和7年)母校から名誉農学博士を贈られています。1938年(昭和13年)3月8日死去。享年86歳でした。

## 本道の病院施設の充実や治療法の指導に尽力したカッター ー学校生徒の身体賢さ・住民の診察やクマの解剖などの草分けー

明治政府は、北海道開拓のために、明治2年(1869)に開拓使を設置し、顧問として米国農務省長官ホールズ・ケブロン(1804~1885)一行、地質測量のベンジャミンS・ライマン(1835~1920)、農業牧畜のエドウィン・ダン(1848~1931)等を迎え、その優れた指導力のもとに、いろいろな開拓事業を進めました。そして将来の人材育成のために、明治4・5年には多数の留学生をアメリカ・フランス・ロシアに派遣しています。さらに、即戦力となる技術を身に付けた人材育成を目的とする高等教育機関の創設を意図し、明治5年3月、開拓使仮学校(東京芝)を開設、明治8年9月に札幌に移して「札幌学校」とし(札幌農学校の前身)、その模範を米国に求めたのでした。

時の開拓次官黒田清隆の努力により、マサチューセッツ農科大学学長クラーク博士(1826~1886)とその教え子のホイラー(1851~1932)、ペンハロー(1854~1910)の3名を迎えて、明治9年(1876)8月、札幌農学校を開校しました。それは、アマーστοカレッジ及びマサチューセッツ農科大学の伝統を範としたものでした。その後も外国人教師として、ブルックス(1851~1938)、カッター(1851~1909)を迎え、さらにピーボディ(明11、12着任一明14、7離任)、サマーズ(明13、6着任一明15、6離任)、ストックブリッジ(明18、5着任一明22、1離任)、ヘート(明21、1着任一明25、8離任)、ブリガム(明22、1着任一明26、11離任。外国人教師の最後)など合計10名を迎えています。これら札幌農学校初期の米国マサチューセッツ州出身の教師は、総じて勤勉で献身的に職務以外の仕事にも非常に熱心に取り組み、ほんとうに北海道開拓期の立派な指導者でした。

今回は、明治11年(1878)9月来札、当初2年の契約を再三にわたり更新し、札幌農学校在職はブルックス(10年半)に次いで長い8年半となったジョンC、カッター(1851-1909)の業績について取り上げてみたいと思います。

ジョン・クラレンス・カッターは、1851年7月10日、マサチューセッツ州ウォレン(ウースターの南西部)で優秀な医師カルヴィン・カッターの長男として出生。名家の出であった母親も、夫の著作活動を手伝うほどの教養のある女性であったといわれ、この家庭環境が後の博学で教養豊かなカッターを育む素地となったのではないかとされています。

カッターは、1872(明5)マサチューセッツ農科大学卒業後、フィラデルフィアのリップコット出版社勤務を経て、ダートマス大学医学部聴講2年の後、ボストン市立病院の外科医となっています。

その後、ハーバード大学医学部に入学、1877年(明10)卒業。クラーク博士の推挙により、1878年(明11)9月来札しています。札幌農学校の英学・生理学教授として招かれました。また、獣医学・水産学教育の創始者といわれます。札幌農学校校医・開拓使医学顧問を兼任、さらに官立札幌病院においても医師の指導及び一般患者の診察に当たるなど医師として献身的に活動したといわれます。札幌農学校の教育方針は、クラーク博士をはじめ多くの外国人教師の指導は、専門科目のみならず「汎く諸派に渉る」学課に及びました。

札幌農学校出身の大英学者といわれる新渡戸稲造は、後年回顧して、カッターの英語・英文学の授業が教養豊かな人格に裏打ちされたきわめて優秀なものであったと絶賛しています。

カッターは病院施設の充実や学生の健康管理についても細心の注意を払い、定期的な身体検査も実施しまし

た。また、無医村地区へ治療に出かけることもあったといわれます。

カッターは多くの外国人教師の中で、最高の学職を有する篤実な人格者として人々の尊敬を集めたといわれます。契約期間は、2年でしたが、契約更新を重ねて、札幌に8年4ヶ月在住。1887年(明20)1月20日、ヨーロッパ経由で帰国しました。明治政府は、カッターの多年にわたる教育・診療指導の功績に対して、帰国に際し勲4等旭日小綬章を授与しました。カッターはこのことを終生の誇りとしたといわれます。

帰国後は、1887年(明20)、医学研究のため1年間ドイツ留学。マサチューセッツ州ウースター市で病院を開業しています。しかし、1893年(明26)母没後は、医院を閉鎖して、メキシコ、カリフォルニア州で過ごし、米国各州を旅行しています。

1897年(明30)以後は、医院開業時の感染による敗血病に加えて卒中にかかり体調をくずして、没するまでずっと病身でした。1909年(明42)、2月2日、脳出血により死去しました。享年57歳でした。生涯独身。ウォレンの墓地に埋葬され、墓碑には、日本政府から授与された勲4等を示す「Meiji IV Japan」が刻まれています。

1910年(明43)、遺言により札幌市民のための「公共水飲み場」建設資金が札幌市に寄付されました。五百ドル(当時の日本円で1,025円19銭)は銀行に預金されたままとなり、諸般の事情により昭和13年(1938)大通公園聖恩碑建設に際し、その四隅に「水飲み場」が設けられ、昭和14年(1939)に完成しています。その資金としては、その時元利合計4,215円となっていた「カッターの寄付金」が支出されたのです。

この「カッターさんの水飲み場」は、今日その歴史的由来はほとんど知られることなく、ひっそりと存在しています。

この「カッターさんの水飲み場」については、北1西5の元道立美術館前のニレの木の下に昭和12年ごろ造られたものという説が有力で、昭和42年道路拡張工事の犠牲となって、老木と一緒に撤去されたというのが通説となっていました。

しかし、札幌市内の医師宮下舜一氏の調査研究により昭和60年になって次のことが解明されたのです。昭和12年の札幌市決裁文書に「聖恩碑の着工に28,215円支出することで市会の議決を得た」とあり、その中に「カッター氏寄付金4,215円」も含まれるという記述が確認されたのです

\*\*\*\*\*

**第 2 回「ホーレス・ケブロン通り」愛称付与推進道民フォーラム」ご案内**

- 日 時** 2006年9月2日(土) 13:10~16:10
- 会 場** 道庁赤れんが庁舎会議室(2階) (参加費無料)
- 主 催** “ホーレス・ケブロン通り”愛称付与推進実行委員会 &北海道  
(構成団体: 愛称付与推進道民有志グループ、北海道日米協会、北海道・マサチューセッツ協会、  
沿道町内会、NPO 日本都市計画家協会、(社)北海道観光連盟、(社)札幌観光協会 )
- 後 援** 在札幌米国総領事館、(社)北方圏センター、(財)札幌国際プラザ
- プログラム** 13:10—13:30 実行委員長挨拶・在札幌米国総領事館総領事挨拶  
13:30—13:55 基調講演(佐々木晴美氏)  
(休憩 15 分間) 交流ティータイム  
14:10—14:25 室内楽演奏  
14:30—16:00 パネルディスカッション  
16:00—16:10 総括・アピール

◎事前申込み(8月28日(月)まで)、当日参加も歓迎いたします。

参加ご希望の方は、北海道・マサチューセッツ協会事務局(TEL 011-231-3392 FAX 011-231-3666)あて

「氏名・住所・電話番号・FAX番号」明記の上、電話又はFAXでお申込みください。

## 今年 2006 年はクラーク博士ご一行来道 130 周年 — 曾孫スチュウ・クラーク氏ご夫妻 9 月末来道の予定 —

ウィリアム・S・クラーク博士(1826—1886)は、優秀な教え子のウィリアム・ホイラー(1851—1932)、デヴィッド・P・ベンハロー(1854—1910)とともに、開拓使長官黒田清隆の招きにより、明治9年(1876)6月来日、東京滞在後、7月25日品川沖から開拓使御用船「玄武丸」に乗り、黒田清隆等とともに7月30日午前10時30分小樽に到着。午後3時小樽上陸(1泊)、翌31日(50歳の誕生日)早朝馬に乗って出発、午前10時40分札幌に到着したといわれます。今年は、ちょうど来道130周年にあたります。

クラーク博士は、北海道開拓の人材育成のために開設された札幌農学校(8月14日開校)の初代教頭となり、その翌年4月までの8ヶ月半その経営・指導に尽力され、そのキリスト教精神による人間教育は多くの学生に深い感銘を与えました。そして、明治10年(1877)4月16日、学生・教授たち全員が見送る中、島松駅で、“Boys be ambitious!”の言葉を残して、馬にムチを当てて走り去りましたが、その高邁なクラーク精神はゆるぎないフロンティアスピリッツとして、今日までこの北の大地にしっかりと根付いています。

クラーク博士の札幌農学校初任教頭としての功績、その識見と人格が偉大であり、その高邁なクラーク精神は、直接その薫陶を受けた第一期生のみならず、それに続く学生たちにも深く浸透したのでした。クラーク博士の札幌農学校在職は8ヶ月半に過ぎませんが、帰国後も、師弟の絆は、多くの往復書簡に継続されています。

後に、「第4期国定教科書」の「小学国語読本」巻11(昭8~昭13)に、クラーク博士の胸像と「少年よ、大志を抱け」の言葉が紹介され、全国的に有名になりました。さらに、「第6期国定教科書」(昭22~昭24)の「国語第5学年中」・「国語第6学年下」にも、クラーク先生の言葉の紹介や同志社を開いた新島襄の恩師クラーク博士の説明があり、いっそう全国的に有名になったと考えられています。

その後、北大創基50周年・80周年・100周年などにクラーク博士をたたえる記念事業が実施されてきました。最近では、2001年(平成13年)が来道125周年にあたり、9月27日(木)~10月3日(水)を「記念ウィーク」として、9月28日(金)を中心に記念式典や記念講演などが行われました。今年2006年の来道130周年は、特別の記念行事の計画はありませんが、クラーク博士の祖孫スチュウ・クラーク氏ご夫妻が9月28日から約1週間の予定で来道されます。スチュウ・クラーク氏は米国アラスカ州スワード市の元市長の要職にあたった方で、今回の訪問は、帯広市とスワード市が姉妹提携(1968年)の国際姉妹都市の関係にあるので、帯広市と札幌市に来訪される予定です。札幌では、北海道庁・北海道大学などの表敬訪問や交流行事、各地の観光・視察などが予定されます。帯広では、姉妹校流の歓迎セレモニーや交流行事・ホームステイ交流なども考えられているようです。

また今年7月には、コンコードグループ(代表Dr. カーチン・11名)が来札、郷土コンコードが誇りとしている札幌農学校第2任教頭ウィリアム・ホイラーの設計した「時計台」(札幌農学校演武場)あや「モデルバーン(模範畜舎)」(北大構内)などを視察してまわり、来道130周年の歴史に感慨を深くしていました。



## 今年 2006 年はエドウィン・ダン来札 130 周年 —真駒内を拓いたダンの牧牛場とモーテン・ラーセンの有畜農業—

明治 2 年(1869) 7 月、明治政府の開拓使設置により、北海道の本格的な開拓がスタートしますが、明治 3 年(1870)5 月、開拓次官となった黒田清隆は、北海道の開拓や農業経営の模範を米国に求めて、マサチューセッツ州出身の米国農務長官ホーレス・ケプロン(1804-1885、当時 67 歳)を開拓使顧問として招聘しました。明治 4 年(1871)7 月来日したケプロンの指導で、早速、東京の青山・麻布に官園が設けられ、北海道に導入する作物の試作・家畜の飼育や農業技術者の養成が行なわれます。また、ケプロンは 3 回にわたり道内各地の視察・調査に來道し、詳細な「ケプロン報文」を作成しています。<この経緯は「HOMAS」No. 43 に詳述>

### 真駒内を拓いたエドウィン・ダンの牧牛場と用水路

エドウィン・ダン(1848~1931)は、オハイオ州で牧場経営をしていましたが、ホーレス・ケプロンの指示によるアルバート・ケプロン(ホーレス・ケプロンの息子)の依頼を受けて、明治 6 年(1873 年)7 月に米国の進んだ畜産技術指導のために、牛 20 頭・羊 100 頭とともに大陸横断の苦難の末來日しました。早速、東京麻布の第 3 官園で約 30 人の生徒に北海道開拓に役立つ技術者養成のために実技を主体にした畑作や畜産の技術を幅広く指導したといわれます。明治 8 年(1875)5 月、エドウィン・ダンは、北海道七重(現在の七飯)官園に、5 ヶ月の長期出張で来て、農業技術や馬の改良に欠かせない去勢技術の普及に努めました。この期間中、札幌官園、新冠牧場も視察しました。また七重では「妻となるべき女性」ツル(15 歳)との出会いがありました。

(後に、国際結婚の難しい手続きを経て、正式に結婚。日本永住の決意を固めたのでした。)

そして、明治 9 年(1876)6 月、28 歳のエドウィン・ダンは、園芸担当のポーマーと共に札幌官園に転勤し、北海道開拓の指導にあたります。直ちに原始林の生い茂る真駒内の地で、牧牛場の建設に着手、搾乳場・乳製品加工場・用水路など、牧場の施設整備に努力しました。このエドウィン・ダンの手により開拓使牧牛場として創設された建物は、その後北海道種蓄場となり、名実ともに北海道の家畜改良や技術普及のセンターとしての役割を果たしてきました。しかし、戦後進駐軍接收のため、新得町に移転しました。

その後、この由緒ある建物をぜひ残したいということになり、昭和 39 年(1964)に、エドウィン・ダン顕彰会により現在地に移設され、「エドウィン・ダン記念館」として関係資料を展示しました。そして、昭和 41 年(1966)札幌市に移管されましたが、老朽化のため本格的な改修工事を行い、平成 15 年(2003)5 月リニューアルオープンを機に、地元住民「エドウィン・ダン記念館運営委員会」により運営されることになり現在に至っています。記念公園内には「エドウィン・ダン銅像」(彫刻家 峯 孝氏制作・昭和 39 年)もあります。

とりわけ、エドウィン・ダンが完成させた「真駒内用水路」(~明 12 年・1879 年完成)は、真駒内川から取水され、現在の中央公園の池を通り、緑町、曙公園から陸上自衛隊駐屯地を通り、精進川に注ぐ約 4km に及ぶ灌漑用水で、家畜の飲料水・農業用水・水車などにも利用され、真駒内牧牛場地域だけでなく、後には広く、平岸、豊平、白石など広域に用水を供給してきた歴史をもっています。これは北の「創成川」<「大友堀」(慶応 2 年)・「吉田堀」(明 3)・「寺尾堀」(明 3)の総称>に匹敵する歴史的価値のあるものです。

この明治9年(1876)7月31日、マサチューセッツ州立農科大学学長ウィリアム・S・クラーク(当時50歳)が、教え子のウィリアム・ホイラー、ディビッド・ペンハローとともに札幌着任。8月14日、札幌農業校開校となります。これに伴い札幌官園の大半が農学校の農場となったこともあり、エドウィン・ダンも協力して、明治10年(1877)我が国最初の模範家畜房(モデルバーン)を建築しました。これは、今日も北大構内に、重要文化財として保存されています。

明治10年(1877)ころには、真駒内の牛舎には牛107頭、馬は農耕用・乗馬用あわせて10数頭、豚も40頭くらいいたそうです。当時のエドウィン・ダンは、本府近くの虻田通り(現在の中央区北4西2)の官舎に妻ツル・長女ヘレン(明10生)と住み、毎日真駒内牧牛場に通っていました。

明治11年(1878)、エドウィン・ダンの提言により新冠牧馬場が整備され、馬産王国北海道の基礎ができたのでした。馬の改良と増殖が進められ、開拓使が米国農法を模範として、馬を使用する農機具の導入を図ったこともあり、馬による大型機械が普及して、北海道の大規模農業の発展に大きく貢献しました。また、ビール製造用の大麦・小麦・亜麻の栽培、暗渠排水による土地改良なども、エドウィン・ダンの指導によるところ大であったといわれます。(今日も、多くの農機具は、ブラウ・ハロー・ホークなど英語名で呼ばれています。また、バター、チーズの製造、ハム・ソーセージの加工、ミルクなどの普及もここからはじまります。)

明治15年(1882)1月、開拓使の廃止により真駒内牧牛場は農商務省の所管<後に「真駒内種畜場」(明19)、「北海道種畜場」(明26)と改称>となりますが、この年、札幌農学校2期生の「町村金弥」(1859-1944)が真駒内牧牛場に勤務して、短期間ではありましたが、エドウィン・ダンの直接指導を受けたのでした。エドウィン・ダンは、この年12月、6年半にわたる北海道滞在に多くの業績を残して、家族と一緒に東京に移りました。さて、その後のエドウィン・ダンは、明治16年(1883)、長年にわたる北海道農業・畜産指導の功績により勲五等旭日双光章を受章しています。米国オハイオ州に一時帰国しますが、明治17年(1884)、駐日米国公使館の二等書記官として再来日、明治30年(1897)まで、外交官として勤務。後明治33年(1900)石油採掘事業を起し、大正元年(1912)三菱会社勤務。昭和6年(1931)5月15日、東京代々木の自宅で永眠しました。(享年82歳でした。)

こうして、エドウィン・ダンの牧牛場からはじまった真駒内の開拓は、肥沃な土地に恵まれ下町の人々は野菜や果物を作り、また種畜場に納める牧草や根菜類を作っていたのでした。

エドウィン・ダンの指導・影響を受けた人に北海道酪農の先駆者となる町村金弥や宇都宮仙太郎、町村敬貴などがいますが、いつか稿を改めて詳述したいと思います。

\*

さて、北海道農業も新しい肥沃な開墾地での、無肥料連作を長年続けたために、大正時代に入って次第に地力が落ちてきたといわれます。大正6年(1917)、札幌酪農組合蓄牛研究会と道庁農政担当が中心になって地力回復のための有畜農業の検討をはじめ、「北海道第2期拓殖計画」として、北欧の有畜農法を取り入れることとなります。

大正12年(1923)、北海道庁は、デンマーク人農家2戸、ドイツ人農家2戸を5年契約で招聘し、札幌近郊と十勝地区で模範経営を行わせることとしました。

デンマークでは165名の応募者、ドイツでは8名の候補者の中から、4戸を決定。十五町歩農家としてデンマークのモーテン・ラーセン<33歳・4人家族>(札幌真駒内種畜場内耕地)、五町歩農家としてエミール・フェンガー<31歳・4人家族>(札幌琴似村農事試験場内耕地)、十町歩農家としてドイツのフリードリッヒ・コッホ<43歳・6人家族>(十勝清水)とウイルヘルム・グラバウ<30歳・4人家族>(帯広)の4

家族が招かれました。

#### 真駒内に大きな足跡を残したモーテン・ラーセンの有畜農業

モーテン・ラーセンは、18歳から20歳までの間、商船学校に学び世界各国の見聞を広め、英語にもドイツ語にも通じていたといわれます。1916年、北シューランドに大農場を購入して多年苦心の結果、その経営に成功し、養鶏事業にも成功していました。

モーテン・ラーセン(33歳)は、妻リーモア(32歳)、長男ポール(8歳)、長女エテッド(6歳)の4人家族で助手のペダー・スヨンナゴー(25歳)と一緒に、デンマークを大正12年(1923)7月10日に出発、ドイツハンブルク港より東亜汽船「アフリカ丸」で出帆して、9月12日神戸入港、そして9月19日に真駒内種畜場に到着しています。

ラーセン一家は種畜場の敷地内に北欧風の白い木造家屋を建て、畜舎を作り、農耕馬2頭、乳牛6頭、豚20頭、鶏50羽を飼い、プラオ、カルチベーター、ハロー、ヘーレーキ、播種機、種子選別機などの機械を使って農業を行ったといえます。この経営状況は真駒内の農家のモデルとなり、農事や家畜改善に大いに役立ったのでした。北海道大学でもそれまでの主穀農業とモーテン・ラーセンの主畜農業の違いを克明に記録しました。モーテン・ラーセンは働き者で、家族は4人。いつも大きなエプロンを掛けて太って体格の良い奥さんは親しみやすく、助手のスヨンナゴーも温厚質朴な青年であったといわれています。

近所の人たちは菜園や果樹園の作り方、農機具の使い方などを教わり、野菜や果物の種子をもらって自宅の畑に植え育てるなどの交流があったようです。こうして日本人に親しまれ、有畜農業による地力回復に成果をあげたモーテン・ラーセン一家も、五年の契約を終えて昭和のはじめデンマークへ帰りました。

そしてこの真駒内地区は、第二次世界大戦後の進駐軍キャンプの接收などもあり、その風景は大きく変貌しましたが、今日もなお、エドウィン・ダンの「真駒内用水路」には水が流れ続けています。また、真駒内五輪記念公園(緑町)には「ラーセン農場跡」の標識が往時を偲ばせています

<以上、真駒内開拓史第一部とします。「北海道を知る歴史発見の旅シリーズ」真駒内コースの歴史散策で、開拓期から今日までの変遷の歴史の跡をたどりたいと思います。>

**新企画** 北海道を知る歴史発見の旅シリーズ —真駒内コースのご案内—

日時 平成19年5月12日(土)10時~14時30分 (実施予定)

場所 地下鉄真駒内駅集合—桜山(真駒内保健休養林)—モーテン・ラーセン農場跡(五輪記念公園)—真駒内用水路(真駒内緑町緑道)—エドウィン・ダン記念館及び記念公園銅像—東急レストラン「ミュウ」昼食会(解散)

参加費 会員・学生 2,500円 一般 3,000円 (昼食代・資料・写真代他)

真駒内の歴史は、明治9年(1876)エドウィン・ダンの牧牛場(後に真駒内種畜場。北海道庁種畜場と改称)開設にはじまります。そして「真駒内用水路」の開設(～明12)、山鼻石山間の馬車鉄道開通(明42—大7)、定山溪鉄道開通(大7年—昭44)、モーテン・ラーセン農場の有畜農業(大12—昭2)、円山と並ぶ桜の名勝地「桜山」のお花見(大正～昭和)、進駐軍キャンプによる接收(昭21—昭34)、自衛隊駐屯地(昭34—)、住宅団地造成(昭35)、さらに札幌冬季オリンピック開催による競技場・選手村等建設(昭47)などの歴史の変遷を経て今日に至っています。この真駒内コースの歴史散策で、南区の開拓期から今日までの歴史再発見をしたいと考えています。

## 日本最初の米国人英語教師ラナルド・マクドナルド ー焼尻・利尻から宗谷・松前を経て長崎へー鎖国日本の扉を開く新しい風となるー

鎖国日本の蝦夷地警備として、幕府は、津軽藩・会津藩などから、国後・択捉・宗谷に請負人・番人を配備、また箱館奉行所の役人を宗谷場所に出張させるなどして厳重警戒にあたりました。1804年(文化元年)9月、ロシア遣日特派大使ニコライ・レザノフがナデシュダ号で長崎へ入港し、幕府に対して根室の通商許可を要求しましたが、幕府は、約半年後に通商不許可を通告しました。その後、幕府の拒絶態度にいら立ちを強めたロシア艦の度重なる攻撃が続きます。ロシア艦は、樺太大泊・千島択捉・利尻島などを襲い、火を放ち、番人を捕え連れ去ることをくりかえしましたが、1813年(文化10年)、日本側が捕えたロシアの艦長ゴロヴニンの釈放により、日露関係は平静化したといわれます。

一方、この頃、欧米の捕鯨船が、高価な香料が得られる抹香鯨、ローソク・灯火用の油・機械の潤滑油・鯨鬚など多方面の用途で莫大な利益が得られる鯨を求めて大西洋から太平洋、さらに日本近海にまで出漁するようになります。特に、アメリカ捕鯨船が多かったのですが、イギリス船・ドイツ船・フランス船も次第に漁場を移して、蝦夷地沿岸・千島方面にまでやってきています。そして、薪・飲料水・食糧を求めて、着岸する外国船が年々激増してきました。これに対して、幕府はその後、薪・水・食糧を与えて穏便に退去させるよう指示していましたが、鎖国政策を守る幕府と通商を強要する捕鯨船との間に、いたるところで紛争が起きていたといわれます。このころ、アメリカの捕鯨船に乗り、日本海での捕鯨に従事し、強い憧れを持ち続けた神秘の国日本への密入国を企てたアメリカ青年がいました。

### 神秘の国日本への憧れを抱いたラナルド・マクドナルドの生い立ち

ラナルド・マクドナルド(1824～94)は、1824年(文政7年)2月3日、米国太平洋岸のコロンビア川河口の英国領フォート・ジョージ(現在オレゴン州アストリア市)で生まれています。父アーチボルト・マクドナルドは、1790年スコットランド生まれで、エディンバラ大学を卒業しています。当時、高級品とされたビーバーの毛皮などを主とする英国の毛皮交易会社ハドソン湾会社フォート・ジョージ交易所に勤務していました。特にビーバーの毛皮は貴重品としてきわめて高い価格で輸出され、ことに中国貿易で莫大な利益をあげていたといわれます。会社の交易事業には原住民インディアンとの友好関係が基本になっていたこともあり、父アーチボルト・マクドナルド(当時33歳)は、その地域のインディアン部族・チヌーク族の大首長コム・コムリの次女コアール・クソアと1823年に結婚したのです。結婚式はインディアンの風習に従った盛大なものだったといわれます。

### 北海道を知る歴史発見の旅シリーズ・マクドナルドの故郷を訪ねるー2007 アメリカ西海岸の旅

参加者募

今回は、北海道歴史発見の旅シリーズ海外篇として、米国西海岸のマクドナルド・三吉(音吉・久吉・岩吉) ゆかりの地を米国「マクドナルド友の会」ジム・モックフォード会長と一緒に訪問すること、札幌の姉妹都市ポートランド市市長表敬訪問をすることをメインとして企画しました。また、ボーイング社・マイクロソフト社なども見学する予定です。

期 日 2007年10月16日(火)～21日(日) <6日間>

日 程 シアトル(ボーイング社工場、マイクロソフト社、他)・アストリア・バンクーバー(マクドナルド&三吉に關わる見学と交流)・ポートランド(市長表敬訪問、他)・ラスベガス(華やかなショーなど)

費 用 280,000円程度(募集人員15名) <詳細は「集要項」をご請求・ご覧下さい。>

翌年2月3日、ラナルドが生まれ、約1ヶ月後に、母コアールは病死しています。ラナルドは祖父コム・コムリのもとに預けられ、母の姉カー・カム・カムに育てられています。

その1年後、父アーチボルトは転勤して、スイス人とインディアン・クリー族との混血ジェーン・クラインと再婚し、ラナルドを引き取ります。ジェーンは優しい人で実の子と分けへだてなく養育したといわれます。

ラナルド9歳の時、父アーチボルトは、フォート・ヴァンクーバー（現在のオレゴン州、アストリア市の東約120km）の交易主任として栄転し、ラナルドは初めて学校（1933～1934）に入ります。2年後、ラナルドはさらに上級教育を受けるため、両親と別れて、レッド・リヴァー・アカデミー（現在カナダのマニトバ州ウイニペグ）で4年間過ごし、優秀な成績で卒業しています。ラナルドが伝え聞いていたかどうかははっきりしませんが、その頃ハドソン湾会社では、三人の日本人漂流民の風貌がインディアンに似ていたこともあり、話題になっていたのです。

チヌーク族には、「祖先は遙かな海の西の彼方から来た」という伝説があり、ラナルドも子どものころから亡き母親のルーツは太平洋の神秘の国、ニッポンだと信じ、憧れを持っていたといわれます。…1834年、米国西海岸フラタリ岬に漂着した音吉、久吉、岩吉という三人の日本人漂流民が、最初インディアンの奴隷にされますが、ハドソン湾会社によって保護され英語の教育を受けることになります。この3人の日本人若者が、とても頭脳がよく勉強熱心で礼儀正しかったので、日本は高度な文明国らしいと推測されていました。卒業後、15歳（1839）のラナルドは、父のすすめでエリー湖北岸カナダのセント・トーマスのモンリオール銀行に見習いとして就職します。セント・トーマスは、それまでのインディアン混血児の多かった地域とは異なり、白人の町でした。ラナルドは、白人社会の中で、自分が混血児であることにより決定的な侮蔑の対象になっていることを知り、強い衝撃と堪えがたい苦悩を覚えます。父親にも相談しますが、かえって白人社会との厚い壁がゆるがないものであることをあらためて知らされます。ラナルドは、銀行員見習期間2年の半ばにして、セント・トーマスを去ります。

ラナルドは、カナダの白人社会での苦悩を耐え忍ぶよりは、広い世界でもっと自由に活動したいと願ったようです。1841年、ミシシッピー川を下る蒸気船の甲板員となり河口のニューオーリンズへ行きます。17歳のラナルドは、船員として生活したいと考え、ニューヨークに出て港湾作業に従事して働き、その後は、船員としてロンドンから出航して、インドのカルカッタで胡椒を荷積みする船、アフリカ西海岸から奴隷を積みこんでアメリカ大陸へ向う船などに乗り組むなどさまざまな経験をしています。その後、ニューヨーク港で、捕鯨船プリマス号（3本マスト・425トン）の甲板員に雇ってもらいます。船は、1845年12月6日、ニューヨークを出航、操業をしながら、南米最南端ホーン岬をまわって、ハワイ諸島の港に寄港して、1847年1月20日ハワイのホノルルに入港します。

### **インディアンの先祖の国…ラナルドの日本への憧れ**

ラナルドは、船乗りたちが日本を神秘的な国、東洋のユートピアと称しているのを知り、また他国人の血のまじらない純粋な血を受け継いできた民族で、欧米の強国を相手に少しも動ずることのない誇り高い島国として、日本への思いをひそかに内部に蓄積していったようです。

1845年（弘化2年）3月15日、米国捕鯨船マンハッタン号が、日本近海の鳥島で漂流していた阿波国撫養港（徳島県鳴門市）の大型廻船幸宝丸の11人を救助し、さらにその翌朝、漂流していた釜石港の千寿丸の11人を救助して、4月17日浦賀港に入港、20日に日本に上陸させています。薪・水・食料・謝礼の品を受け取り21日出港しています。この時、浦賀に滞在したクーパー船長は幕府と交渉をもった（通訳は、オランダ通詞森山栄之助）最初のアメリカー人といわれます。この時は、幕府は漂流民の上陸を許可しましたが、「今後はオランダ・中国以外からは一切受け入れない」というオランダ語の文書をクーパー船長に渡しています。このような経緯が、後にハワイに戻ったクーパー船長の談話として、捕鯨船の海員誌「ザ・フレンド」（1846年2月）に「クーパー船長日本訪問談」が掲載されていました。ハワイで捕鯨船に乗り込むのを待っていたラナルドは、この記事のことを知り、は

じめて日本についての詳しい情報を得て、いよいよ、真剣に「日本へ行きたい」と考えるようになったのではないかと推測されています。日本へ行くにはどうすればよいかと考えて、日本近海の漁場にむかう捕鯨船を探します。そこで、ラナルドは日本へ行く準備として、英語の辞書・文法書・イギリスの歴史書・世界の地理書などを買って整えました。日本で、自分を教養のある人間として英語の教師として雇ってもらうことを強く期待していました。そして、プリマス号のエドワーズ船長に再会して、雇用契約を結び、航海の計測に必要な四分儀と航海暦も買い求めて、日本近海への出航に備えていました。

#### **参考** アメリカに最初に上陸した3人の日本人、音吉・久吉・岩吉<三吉>の数奇な運命

1832年(天保3年)11月11日、鳥羽から江戸へ向かって米や陶器を積んで出港した「宝順丸」(現在の愛知県知多郡美浜町小野浦の樋口源六の持船)が、遠州灘で大暴風雨に遭遇し、約14ヶ月太平洋上で漂流の末、1834年3月、米国西海岸、現在のワシントン州のフラットリ岬に漂着しています。乗組員14名中、音吉(14歳)、久吉(15歳)、岩吉(28歳)の3人だけが生存していました。この若者3人は、アメリカに上陸した最初の日本人(ジョン万次郎よりも7年前)といわれますが、その後、数奇な運命をたどることになります。最初、現地のインディアンマカ族に捉えられ奴隷にされますが、幸いにもハドソン湾会社の現地責任者ジョン・マクラフリンに助けられて、フォート・バンクーバーで宣教師から英語教育を受ける機会を得ました。その後1835年6月、イギリス船イーグル号でハワイ、ロンドンを経由して日本へ送還されることになりました。マクラフリンは、漂流民を日本へ送り返すことによって、英国と日本との交易のための開国交渉を期待していたようです。途中マカオに滞在して、ドイツ人宣教師の聖書の日本語訳を手伝って1年がかりで完成させています。1837年アメリカ船モリソン号で帰国しようしますが、浦賀・鹿児島で幕府軍の砲撃を受けて鎖国日本への入国を果たせず、再びマカオへ引き返しています。

彼等はその後、永年マカオに住みますが、音吉は上海に移り住んで、1843年(26歳の時)イギリスのデント商会に就職、イギリス人女性と結婚します。絶えず漂流民の日本帰国を援助したといわれます。音吉は、イギリス海軍の通訳として、2度(1849年浦賀、1854年長崎)、日本を訪れています。しかし、妻子もあり帰国の意志はなかったようです。1854年日英和親条約の締結には通訳者として大いに貢献しました。彼は、この時すでに英国市民権も得てかなり裕福な生活をしていました。その後イギリス人妻が病気で亡くなり、後にマレー人女性と結婚し、1862年シンガポールへ移住。1864年、音吉はジョン・マシュー・オットンとしてイギリスに帰化(日本人最初)。その3年後の1867年1月19日、49歳で波乱に満ちた生涯を終えました。シンガポールブキティス地区のイギリス人墓地に埋葬されています。

(注)バンクーバー国立史跡公園内に「三吉顕彰記念碑」(1889年8月建立)が日本ボーイスカウト兵庫連盟から寄贈されています。

1947年秋、プリマス号はハワイを出航、マリアナ諸島・グアム、バタン島、香港を経由して日本近海に向かっていきます。1848年(嘉永元年)3月から6月にかけて日本海で捕鯨を続けながら樺太西方の海まで北上します。ラナルドは遥かに遠く波間にかすむ、神秘的な国日本の島影に胸の高鳴りを覚えます。6月27日、ラナルドは、長年練ってきた潜入計画を実行に移す決意をし、船長との約束に従って譲り受けたボート(リトル・プリマス号)に書物・文房具・食糧・衣類・四分儀などの荷物を積み込み、いよいよ日本国の小島を目標として、母船を離れました。

#### **ラナルド・マクドナルド日本上陸……焼尻・利尻・宗谷・松前そして長崎へ**

ラナルド・マクドナルド(24歳)が最初に焼尻島に上陸したのは、1848年(嘉永元年)6月27日でした。彼は高台に登って、この島を無人島と判断しました。数日滞在の後、漂流を偽装するためにわざとボートを転覆させて、7月1日に利尻島上陸を目標としました。そして、翌日2日朝、計画通り漂着を装って利尻島上陸に成功した彼は、捉えられ

はしたものの、アイヌや番人の人びとから食べ物・衣服・寝具の提供など丁重な扱いを受けたといわれます。中でも利尻運上屋(交易所)の番人タンガロ(多次郎)とは言葉を教えあいお互いに親密な友情を覚えるまでになりました。やがてタンガロに伴われて7月下旬宗谷勤番所に送られます。そして、7月26日宗谷を出帆しますが、風向きが悪く15日間もかかってやっと8月10日に松前に入港し、北方の江良町村に護送されます。松前藩では、ラナルド・マクドナルドの長崎護送について慎重な準備をすすめます。幕府の沙汰を待って、9月5日松前藩の御用船「天神丸」に乗せられて、松前を出帆し、日本海岸ぞいに南下しました。

順風を受けて9月16日に長崎港に到着しています。まず、長崎奉行所の取り調べを受けた後、奉行所に近い大悲庵(崇福寺末庵)を改装した座敷牢に収容されますが、良い待遇を得ています。接見した長崎奉行井戸対馬守は、マクドナルドの誠実な人柄や教養の深さを知り、彼が英語教師として適任であると考え日本人通詞の指導を依頼したのです。この頃の国際情勢としてはオランダ通詞だけでなく英語通詞の養成が急務とされる事情がありました。こうして、日本最初の英語教育が行われることになりました。生徒は、奉行所から選ばれた、森山栄之助(1820-1871、当時28歳)ら14名のオランダ通詞でした。マクドナルドは座敷牢の格子を隔てて、約7ヶ月間通詞たちに英語を教え、自らも「英和単語帳」を作るなどして、熱心に日本語の勉強をしたといわれます。マクドナルドの「日本回想記」によれば、これら14名の生徒は、頭がよく理解が早かったようで、最前列に座っていた森山栄之助(1853年ペリー来航時の幕府の大通詞)は、最も優秀であったようです。これらの通詞たちは、幕末から明治初期にかけて、日本の開国にむけて貴重な存在として活躍することになります。このように、マクドナルドの苦心の入国は幸いにも徒労に終わらなかったのですが、密入国者として10ヶ月ほど監禁状態で過ごした後、長崎から退去させられます。

#### 丁重な待遇を受けた日本に「soinara」(日本語のサヨナラ)・・・ラナルド帰国・放浪の人生

1849年(嘉永2年)4月26日、長崎に入港していたアメリカ軍艦プレブル号に他のアメリカ漂流民13人とともに引き渡され、帰国することとなりました。日本での日本人のマクドナルドの扱いは、終始丁寧なものでした。それは、マクドナルドが非常に礼儀正しく教養のある人間として遇され、彼自身も日本語の勉強に熱心であり、日本を深く理解しようとしていたからです。マクドナルドは、後年、長崎の監禁生活中の「日本最初の英語教師」の体験を誇りと満足をもって終生忘れることの出来ない思い出としてふりかえています。

マクドナルドは、プレブル号のグリーン艦長に、日本滞在の供述書を提出しています。(これが米国国会上院の公式記録として残ることになります。)日本退去後のマクドナルドは、上海・マカオ・シンガポールなどの寄港地を経てインド洋上マダガスカル沖で難破するなど多難な航海の後、オーストラリアメルボルン近くの金鉱掘りに従事するなど放浪を続け、1853年1月、29歳の時に帰国しています。すでに父はなく、義弟との牧場経営や、鉱山業に関わる仕事を転々としていたようで、1860年代半ばから80年代半ばまでのことははっきりしていません。この間に、マクドナルドは、かつてセント・トーマスで体験したような激しい人種差別をもう一度味わされたのではないかと推測されています。彼は「ひどい幻滅」を感じて、親族や友人とも音信を絶ち、自らの殻にとじこもり、転々と職や住居をかえていたと思われます。1882年ころになって米国ワシントン州に移り、その後、フォート・コルヴィルに定住しています。そこに粗末な小屋を建てて住み、旧友マクラウドとの交友も復活して、彼の手許に保管されていた自分の日本滞当の覚え書などをまとめて出版することに情熱を傾けるようになります。しかし、マクドナルドの晩年の情熱は報われることなく、彼は「日本回想記」の出版を見ないで1894年8月5日、米国ワシントン州トロダの近くで、70歳の生涯を閉じたのです。彼は、姪ジェンニー・リンチの腕の中で「サヨナラ、マイディア、サヨナラ」と日本語でつぶやいて永遠の眠りについています。

マクドナルドの生涯は、人種差別の負い目を背負っての12年間の世界放浪と、20年間にわたる国内放浪を経験した後、生まれ故郷にもどり、あらためて自分の「世捨人の殻」を破り、晩年になって自らの人生のハイライトの部分を再確認したかったのだと思われます。

## ロナルド・マクドナルドを記念するもの

- ① ラナルド・マクドナルド「上陸記念トーテムポール」( 焼尻島白浜海岸 )  
昭和62年6月27日設置
  - ② ラナルド・マクドナルド顕彰碑 ( 利尻富士町鷺泊字野塚 )平成8年(1996)10月23日建立  
\* 利尻町立博物館・マクドナルドに関する展示コーナー ( 利尻町仙法志字本町 )
  - ③ 史蹟「宗谷護国寺跡」( 稚内市宗谷 )
  - ④ ラナルド・マクドナルド顕彰之碑 ( 長崎市上西山町松森神社脇 )  
平成6年(1994)11月11日建立
  - ⑤ ラナルド・マクドナルド墓地記念碑  
( 米国ワシントン州 トロダ、Ronald McDonald's Grave State Park )
  - ⑥ ラナルド・マクドナルド生家および記念碑 ( 米国オレゴン州 アストリア )  
1988年5月21日建立
  - ⑦ チヌーク族大酋長の墓・マクドナルドの祖父の墓 ( 米国オレゴン州 アストリア )
  - ⑧ インディアンチヌーク族の伯母さんの像(イルチー像)  
(米国オレゴン州 バンクーバーのコロンビア川沿い)
- 日本マクドナルド友の会(会長・富田虎男立教大学名誉教授、事務局長・西谷栄治利尻町立博物館学芸係長)「マクドナルド通信」発行
  - 米国マクドナルド友の会 ( 現在会長は、ジム・モックフォード氏 )( 創立は、富田正勝エフソンポートランド社長故人・元アストリア図書館長ブルース・バーニー氏ら ) 1988年(交流)  
\* 1998年9月、マクドナルド日本上陸150年を記念して、米国マクドナルド友の会メンバー5名が来日し、利尻・松前・長崎(長崎マクドナルド友の会)などゆかりの地を訪問。中野 昭氏、フレデリック・ショット氏 他  
\* 1999年6月、日本マクドナルド友の会事務局長・西谷栄治氏、米国オレゴン州 アストリアの生地やワシントン州 トロダの墓地などを訪問。  
(英語教科書にも採用される)  
啓林館高校英語教科書1年用教材  
Lesson 1 「Crossing the Bridge between Language」  
同 中学校英語教科書3年用教材  
Reading for Pleasure 「The First English Teacher in Japan」



<参考文献及び参考資料>

- ・マクドナルド「日本回想記」(富田 虎男訳訂)刀水書房
- ・「海の祭礼」(吉村 昭著)文春文庫
- ・「黒船前夜の出会いー捕鯨船長クーパーの来航」(平尾信子著) NHKブックス
- ・羽幌町焼尻支所資料
- ・利尻町立博物館資料(西谷栄治氏提供)
- ・稚内市史資料
- ・松前町史資料(田中建一氏提供)
- ・長崎歴史文化博物館資料(松尾 晋一氏提供)
- ・長崎南ロータリークラブ資料
- ・城陽市国際交流協会資料
- ・日本ボーイスカウト兵庫連盟資料
- ・北海道新聞記事
- ・読売新聞記事、
- ・その他インターネット資料など

## 地質測量・鉱床調査のベンジャミン・S・ライマン —北海道鉱山開発の基礎を築き、多くの優れた日本人鉱山技師を育てる—

明治政府が進めた北海道近代化の開拓の歴史は、きわめて急テンポの展開であり、それはまた、北海道と米国マサチューセッツ州との国際交流の出発点でもありました。明治2年(1869年)7月、開拓使を設置して、諸外国の先進技術・文化導入の方針を定め、78人の外国人技師・専門家を招きました。そのうちアメリカが最も多く48人でした。

明治3年(1870年)5月開拓次官となった黒田清隆の努力により、まず、明治4年(1871年)7月、開拓使顧問として米国農務省長官ホーレス・ケプロン<マサチューセッツ州出身>(1804~1885)一行を迎えます。[黒田清隆は、明治7年(1874年)8月、第3代開拓使長官になり、開拓使廃止直前の明治15年(1882年)1月まで、本道行政の直接の責任者として活躍し、北海道開拓の基礎を築いた最大の功労者といえます。]

続いて明治6年(1873年)1月、地質測量のベンジャミン・S・ライマン<マサチューセッツ州出身>(1835~1920)一行、そして7月には、農業牧畜のエドウィン・ダン<オハイオ州出身>(1858~1931)、さらに明治9年(1876年)7月即戦力の人材育成を目指す高等教育のウィリアム・S・クラーク<マサチューセッツ州出身>一行などを迎えて、その優れた指導力のもとに、いろいろな開拓事業を進め、また「札幌農学校」を開校したのでした。これら米国マサチューセッツ州出身者は、総じて勤勉で献身的に職務以外の仕事にも非常に熱心に取り組み、ほんとうに北海道開拓期の立派な指導者でした。

今回は、明治6年(1873)1月に来日し、3年間にわたり北海道全域の地質測量・鉱床調査を行い、本道鉱山開発の基礎を築いたベンジャミン・S・ライマン(1835~1920)の業績について取りあげてみたいと思います。

ベンジャミン・S・ライマンは、1835年<天保6>12月11日、マサチューセッツ州ノーサンプトンの名門の家にサミュエル・ライマンを父として生まれています。祖父はイェール大卒で裁判所判事、父はハーバード大卒で判事、母はスミスカレッジ創立者ソフィア・スミスの従妹で、知性を誇る由緒ある英国型の家筋でした。ライマンはまじめで向学心の強い青年でハーバード大学(法律)を卒業。法律事務の仕事には就かず、著名な地質学者であったペンシルベニア州フィラデルフィアの伯父J・P・レズレー博士の地質測量を手伝っています。当時、ペンシルベニア州には古生代の炭田層の分布が知られ、貴重なエネルギー資源として地質調査が行われていました。その後、コンコードの中学校で教鞭を取り、当時この地に集まっていたオルコット、エマーソン、ソー、ホーソンなど著名な作家・思想家などの影響もうけたといわれますが、数月にして教育者の生活を辞めています。1859~1862、フランス・パリのエコール・ド・ミン及びドイツフライブルグのベルグアカデミー鉱山学校で、地質・鉱物学を学びます。帰国後は、アメリカ各地の地質鉱床調査に従事しています。1870年<明治3>イギリス政府の委嘱で1年にわたり炎熱のインドパンジャブ地方の油田調査を行い、帰途、中国、日本に立ち寄り翌年帰国しています。

ライマンは、明治5年(1872年)5月、開拓使の招聘を受け、日本行きを決心しています。ライマン(37歳)は<年俸7,000ドル>の契約で、助手H・S・マンロー(後にコロンビア大学学部長)とともに来日、明治6年(1873年)1月18日東京に到着しています。翌日、開拓使官舎に移り、早速英和辞書や会話本を注文して、地質調査準備のかたわら日本語学習に励んだといわれます。来日後、ただちに北海道地質測量のこと

を嘱され、まず日本人助手を要求します。そこで開拓使は「開拓使仮学校」、<（明治5年3月、東京芝増上寺境内に設置→明治8年9月札幌に移して「札幌学校」（札幌農学校の全身）→明治9年8月14日「札幌農学

**ライマン・コレクション** ライマンの死後、彼の残したコレクションは、米国哲学協会、ペンシルベニア歴史協会、郷里ノーサンプトン市のフォーブス図書館に分割して寄贈されました。フォーブス図書館には1921年春に約5千点の資料がフィラデルフィアから到着しました。

ライマンは大変な親日家で、几帳面な性格だったので、このコレクションには約2千点の日本関係資料が含まれていました。日本関係資料をおおまかに分類すると、日本文化に関心をもち収集した江戸時代から明治初期にかけての広い分野にわたる文献、書簡類（彼自身の書簡の控綴を含む）、調査や日常生活に関する会計簿類、彼の著書、膨大なフィールドノート、地質測量図、彼の日本語の修得に関する資料、写真などとなります。<その整理には、当時マサチューセッツ農科大学（現マ州立大学）板野新夫助教授とアマースト大学学生中川久順が協力しています

>

1985年、フォーブス図書館がこのコレクションを手放すことになり、その保存運動の結果、1987年と1990年にマサチューセッツ州立大学が購入し、現在は同大学図書館が所蔵しています。1986年マ州立大学図書館福見恭子さんの呼びかけにより、北海道でも「ライマン・コレクション保存協力委員会」を設立し、募金運動を展開して多額の支援協力をしています。

校」として開校>から13名の有為の青年を選抜しています。ライマンとマンローは、短期間ではありますが、これらの青年たちに、数学・物理・化学をはじめ測量・地質・鉱物学の専門的知識を教授しています。日本には正式の地質学の教育がなかった時代で、ライマンの地質調査の方法は日本の地質学の先駆となったといわれます。そしてライマンは、明治6年（1873年）4月から3年間、地質学鉱山学教師・地質測量鉱山技師長として、助手マンローと同行の13人の日本人の青年たちとともに道内各地の地質鉱床調査の測量を開始します。

初年度は、明治6年（1873年）4月下旬、まず、北海道南部の沿岸・積丹半島・幌内炭田の調査にあたり、この後、開拓使顧問ホーレス・ケブロンに同行して石狩等を調査しています。また埋蔵量の豊富な石狩炭田を察知し、特に幌内付近が適切であることを指示しています。ライマンは苦難の多い奥地踏査中にも、雨天の日などは、テント内で終日、日本語の勉強をしたそうです。またアイヌ語も日常会話を理解する程度まで修得したといわれます。この年は、降雪のため11月中旬に調査を打ち切り帰京します。そして、「北海道地質測量報文」を提出しています。

第2年度は、明治7年（1874年）5月から、石狩炭田の詳細な測量、次いで石狩川水源・十勝川流域等を調査。さらに、釧路根室各地の鉱床をたどって、北見・宗谷・留萌・小樽を経由する北海道沿岸調査をして10月下旬に函館に到着・帰京しています。この第2年度の北海道一周地質調査では、ライマンは、すべてを日本語でやり通したといわれます。ライマンは、松浦武四郎の「東西蝦夷山川地理取調図」を携帯したといわれますが、このほとんど人跡未踏の原野に行く、熾烈をきわめた調査旅行にもかかわらず、チームワークも円滑且つ和気あいあいのうちに見事な成果を収めています。そして北海道地質検査巡回記事・調査報文・地図などを提出しています。

ライマンが、東京の平河町に購入した家には、石灯籠のある広い庭園・花壇・池などがある和風の邸宅でした。明治7年暮れには、使用人の家族も移り住んで、家中にぎやかになり、彼は家庭的な雰囲気を楽しんだといえます。使用人の子供を学校にやり、病気をすれば、入院費を出し、家庭問題が起きれば、よき相談相手とな

って世話をしたので、皆に、一家の長として、尊敬され、慕われたといわれます。また室内には書画を掲げ、日本の伝統芸能である義太夫・文楽・落語などにも不快関心を寄せ、日本庭園作りにも力を入れるなど東京山の手の生活と習慣を楽しんだようです。

第3年度は、明治8年(1875年)6月中旬から調査を開始して、札幌・石狩・幌内地方の幌内石狩川間と幌内空知川間の連絡通路の測量に当たり、道内の3年間の調査を終えて、東京へ戻ります。そして、200万分の1の北海道地質図である「日本蝦夷地質要略之図」を完成し、さらにこの地質図の説明書ともいべき「北海道地質総論」をまとめ、「北海道地質測量報文」などを提出しています。後にこれらの業績は、幌内炭鉱<明治13年(1880年)開坑>をはじめとする北海道の鉱山開発の基礎となっています。また、その運搬計画のために測量された鉄道路線は、後に明治15年(1882)幌内鉄道の開通となって実現しています。さらに、ライマンは、開拓事業に対して、社会制度・教育制度・移民制度に関しても、時の黒田清隆長官に進歩的な建言をしたといわれます。

この当時の北海道の踏査は、道もないところを切り開きながら毒虫に悩まされ、熊の恐怖におびえながら野営を重ねていくものでした。ライマンの調査隊は、開拓使の事務官、荷物運搬のための人夫等もふくめて、総勢40~50人からなり、全体が一団として進行するのではなく、その職分に従って行動したようです。ライマンは馬上から、地質の露頭を観察しスケッチをしながら移動したようです。同行した当時の日本青年たちが書き残したのものによると「密林の身の丈にも余るほどに生い茂った熊笹を刈り取るのが第一の仕事」と語っています。このきびしい調査旅行の間、ずっと起居を共にして、地質学とその実地の応用技術を教え導いたライマン、マンローの偉大さ、そしてその新しい技術を体得しようと辛抱強く従った若き技術者たちにはほんとうに敬服の限りです。ライマンの地質調査の目的は、有用鉱産物の発見とその開発でしたが、最も力を注いだのは石炭の調査で、後の茅沼炭鉱・幌内炭鉱・美唄炭鉱などの基礎資料が報告書にまとめられています。

その後、開拓使のすすめにより、明治9年(1876年)2月<年俸10,000ドル>で2年間内務省、ついで明治11年(1878年)2月<年俸14,000ドル>で工部省の囑託となり明治12年(1879年)7月まで、東北・北陸・中国・四国・九州の地質調査にあたり、特に新潟油田の開発に大きな影響を与えたといわれます。ライマンの指導を受けた日本人の青年たちは、後に、優れた鉱山技師となり北海道のみならず日本の鉱業開発に貢献しています。

ライマンは、契約終了後も自費で日本に滞在し、各地の鉱山、炭鉱、温泉などの報告書をまとめ、全国的な地質調査事業を続けようとしていましたが、明治政府が、明治12年(1879年)、当時東京大学理学部採鉱冶金学科で教えていたドイツの地質学者エドムント・ナウマンに、その後の日本各地の地質調査の仕事を任せの方針をうちだしたため、ライマンは、いわば事業半ばにして、明治13年(1880年)12月22日、日本を立ち、ヨーロッパ経由で明治14年(1881年)5月帰国したのです。8年ぶりにノーサンプトンに戻りました。

その後1887年、ペンシルバニア州フィラデルフィア市を永住の地とします。再び各地鉱山の調査にあたり、1887~1895年ペンシルバニア州立地質局副長、鉱山会社顧問技師として活躍します。このころ、日本に関する多くの論文を学術雑誌に発表しています。1895年<明治28>、フィラデルフィア市に事務所を設置。主として石炭鉱山の顧問技師として活躍します。明治36年(1903年)、日本鉱業会は、ライマンを名誉会員に推薦しています。明治40年(1907年)、フィリッピンのラントア炭田の調査に赴き、途中日本に立ち寄って、わずか2日間の滞在ながらも門下生たちの歓迎をうけています。また、ライマンの晩年は、経済的には楽ではなかったようですが、日本の弟子たちとの交流も大事にし、また日本から留学した日本青年達の面倒もよく見てお世話されたということです。

ライマンは、恵まれた環境で育ち、真面目な努力家でもあったので、その学識・趣味はきわめて広く、専門の地質学・鉱山学・地理学のほかに、文学・哲学・美術・民俗などの知識が深く、語学も非常に堪能であったといわれています。ライマンは、日本語の修得のみならず、日本文化・古典文学にも深い関心を寄せ、非常に広い分野にわたる日本の資料・文献を収集し、自ら日本文化を研究し、著作活動しています。また、日本をこよなく愛し、帰国後も日本での生活を懐かしみ、日本の祝日には「日の丸」を掲げ、室内には日本の書画を飾り、お茶をたしなみ、在留日本人を自宅にまねいたりして交友関係を保ち続けていたといわれます。

1920年<大正9>8月30日、フィラデルフィアで84歳で死去。ライマンは終生独身で、菜食主義の実行者であり、日本をこよなく愛した外国人の1人でした。

＜参考文献及び参考資料＞

・「北海道を開拓したアメリカ人」(藤田 文子著) 新潮選書 ・「お雇い外国人―開拓」(原田一典著) 鹿島出版会 ・「北海道開拓功労者関係資料収録」(下巻) ・「近代日本鉱業の黎明期と來曼先生」(ライマン先生顕彰録) ・「ライマン・コレクション展関係資料」(第41回北海道開拓記念館特別展 1995) ・その他インターネット資料など ライマン・コレクション保存協力委員会常任委員 関 秀志氏より、多数の貴重な資料提供をいただきました。

＜おことわり＞ 紙面の都合で、ライマンと開拓使との確執、ライマンの失恋問題等は割愛しました。

## “ホーレス・ケプロン通り” 愛称付与運動の意義

### ——北3条通りを“ホーレス・ケプロン通り”と呼ぼう！——

明治4(1871)年1月、黒田清隆開拓使次官が渡米し、当時のグラント大統領への要請により、同年7月、67歳の高齢で、かつ、米国農務局長の要職にあったホーレス・ケプロン(1804~1885、マサチューセッツ州出身)が、開拓使顧問として秘書と2名のエキスパートを伴って来日しました。

以後、3年10ヵ月の日本滞中で、北海道全域の測量調査や鉱物資源調査の成果に基づいて作成した“ケプロン報文”こそ、北海道の近代化に向けた開拓の原典となり、多くの内外の関係者の努力と相俟って、開拓使仮学校の設置~札幌農学校の開校、石炭など地下資源の開発、鉄道・道路網や港湾の計画、畜産・酪農の振興、現地の気象に合った畑作の奨励等々の展開をもたらしたことは、周知のことと思います。

この大きな功績への感謝と敬意を表すため、2004年11月27日(土)、「ホーレス・ケプロン生誕200年記念の集い」が道庁赤レンガ庁舎会議室で開催されました。これを機に、愛称付与運動の提案者・佐々木晴美氏から、ホーレス・ケプロンの北海道開拓に対する気概と多大な功績を象徴するものとして、開拓使本庁舎(明治12(1879)年1月焼失)に近接する道庁赤レンガ庁舎の前から、かつて“開拓使通り”と呼ばれた札幌市の北3条通りの、永山武二郎記念公園付近までの約1キロメートル区間を“ホーレス・ケプロン通り”の愛称をもって呼ぶことにしてはどうかという提案がなされました。

この提案は、現在の“北3条通り”が、開拓使本庁舎の建設と官営工場の設立構想が明治4(1871)年に開拓使によって或る程度固められていたものの、関連器械類の購入を含むホーレス・ケプロンの手配・進言によって創生川東岸地域一帯に整備された当時の近代的な工業ゾーンを結んだ開拓使時代のメイン・ストリートであったことを考慮したものでした。佐々木晴美氏の提案は、参加者の大きな感動と賛同を得て、以後愛称付与推進運動として継続されることとなりました。

その後、提案者・佐々木晴美氏の新聞への寄稿(北海道新聞、2005年1月8日夕刊の「私の発言」)に寄せられた賛同者を中心に「道民有志グループ」が結成されました。この「道民有志グループ」、北海道・マサチューセッツ協会、北海道日米協会が連携しながら、道庁赤レンガ庁舎会議室において、“ホーレス・ケプロン通り”愛称付与の意義などについて語り合う「第1回道民フォーラム」(2005年8月27日)、次いで「第二回道民フォーラム」(2006年9月2日)を開催しました。高橋はるみ北海道知事・上田文雄札幌市長の基本的なご賛同をいただき、北海道・札幌市の担当部局と事務レベルでの打ち合わせも進めてきました。

その後、沿道の各町内会・関連団体等の賛同の輪が拡がりを見せるとともに、道庁赤レンガ庁舎前の区間の都市再開発事業も視野に入れた運動として今日に至っています。なお、“ホーレス・ケプロン通り”の愛称付与対象区間を延伸して欲しいとの声も寄せられており、運動の輪がさらに広がっています。

この愛称付与の意義は、日本近代化に関する歴史的視点・日米関係史の視点からも極めて大きいと思います。さらに、札幌市のまちづくりの観点からも、重視すべきであると考えられます。

このような認識のもとに、北3条通りを“ホーレス・ケプロン通り”という愛称で呼ぶための道民運動に、より多くの皆様のご賛同と継続的なご参加・ご支援を期待しています。

## 北海道近代の黎明・・・松前藩から北海道へ —交易の拠点「箱館」の発展と高田屋嘉兵衛の活躍—

### ■夜明け前

近年、道南地区の縄文遺跡群が大きな話題になっていますが、北海道に人々が定住したのはいつなのか、興味深いことです。……歴史的にはかなり古くから、アイヌ民族が本州東北部から北海道、千島列島、樺太(サハリン)を生活圏としていたようですが、14～15世紀の道南には多くのアイヌ集落があり、和人(シサム・シャモ)集団との交易が盛んに行われていたようです。また道南地域には、津軽の十三湊(とさみなと)を拠点とした安藤(安東)氏配下の豪族による、12の「館」(たて) <城砦・拠点> を中心とした和人集落がつくられて、蝦夷(アイヌ)との産物の交易で繁栄し、その活動は日本海一帯から大陸にまで及んでいたといわれます。しかし、和人によるアイヌ人刺殺事件を発端として、コシヤミン酋長を中心とするアイヌ人側が12の「館」(たて)を激しく攻撃しました。その結果和人10館(たて)が敗れ、やっと下之国茂別館・上之国花沢館の2館(たて)が勝ち残ります。その後、上之国の守護武田(蠣崎)信広がコシヤミン酋長父子を弓で射殺、アイヌ軍が崩壊して戦いが終結したといわれます。

### ■松前藩の時代へ

こうして、武田(蠣崎)信広(松前藩の祖)が道南の館主の覇者となり、第5代武田慶広のときに豊臣秀吉や徳川家康から、独立した諸侯とみとめられて姓を「松前」と改め、「福山城」(松前城)を築城して、「松前藩」の成立となります。松前藩は、米がとれないことから「無高(むだか)の藩」と呼ばれ、海産物・毛皮などの交易で繁栄を築いていきますが、シャクシャインの戦い、クナシリ・メナシの戦いなどアイヌ民族との抗争も続きました。アイヌ交易の独占的な権利を得た松前藩は、生産物の交易を拡大し、松前・江差・箱館の「松前三港」を交易拠点として繁栄しました。やがて、天明期(1781～1788)ころから、北前船の出現により、寄港地も多くなりますが、箱館に入港する船が急激に増加するようになり、天明5年(1785)には、長崎倭物会所が箱館に置かれてから、「箱館」が倭物集荷拠点となり発展していきます。

松前藩は、幕末に勤王派となったために、箱館戦争(1868-69)で土方歳三の旧幕府軍の攻撃によって落城、松前藩の栄華は灰燼に帰します。そして明治2年(1869)版籍奉還を願い出て、260年余の歴史の幕を閉じるのです。そして明治4年(1871)、廃藩置県により「館県」となります。

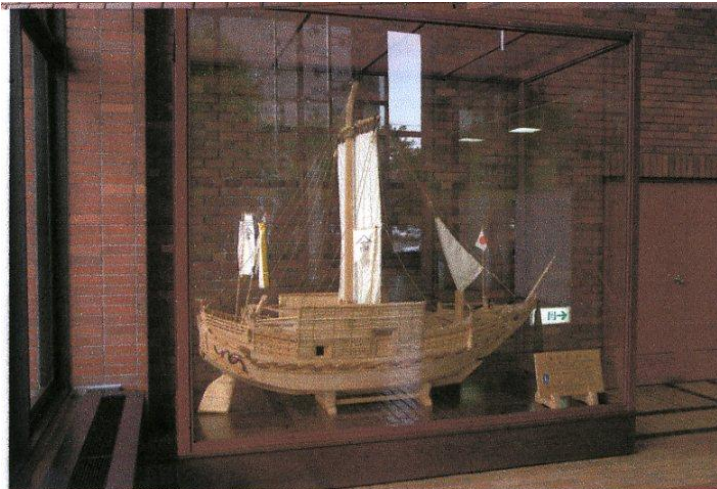
江戸中期からロシアの南下政策で、ロシア船が各地に寄港を求めてきましたが、松前藩は、国法により交易できないと通告していました。しかし、寛政元年(1789)6月、ロシア使節アダム・ラスクマン一行が箱館に入港しました。これが箱館に入港した最初の外国船でした。寛政8年(1796)9月、イギリス航海士プロトンのプロビデンス号が内浦湾に来航しました。(この時、プロトン船長が有珠山や駒ヶ岳などの火山軍に驚き「ボルケイノーベイ(噴火湾)と命名したといわれます。」度重なる蝦夷地近海の外国船出沒に対して、幕府は北方警備が急務であるとし、寛政10年(1798)に蝦夷地直轄の方針を決定します。幕府は寛政11年(1799)東蝦夷地を松前藩から上知させて直轄し、箱館に蝦夷奉行(のち函館奉行に改称)を置きました。対外警備のため、第一に釧路・根室への沿岸道路の開削を急ぎ、官船も準備しました。あわせて西蝦夷地の交通条件も駅遞を設けるなどして幕府直轄後に大きく改善されました。(その後まもなく伊能忠敬・間宮林蔵らの測量により、ほぼ完全な北海道全図

ができました。)蝦夷地の生産増強・農耕をすすめるために八王子からの屯田兵を入植させたがあまり成功しなかったといわれます。それから、場所請負人の搾取を排除するべく、蝦夷地交易の改革「幕府直捌(じきさばき)」を実施しています。さらに、キリスト教などの侵入を防ぐために、東蝦夷地全体に五カ寺が計画されましたが、有珠の浄土宗善光寺(文化元年 1804)、様似の天台宗等じゅ院(文化2年 1805)、厚岸の臨済宗国泰寺(文化2年 1805)の三カ寺が建立されました。のちに善光寺末寺として、宗谷に北蝦夷地最大の寺院として浄土宗護国寺(安政3年 1856)が建立されています。

#### ■箱館港の発達と高田屋嘉兵衛の活躍

蝦夷地が幕府直轄地となって、箱館奉行所(享和2年・1802)が、重要な拠点となります。国後・択捉を含む東蝦夷地全域の産物が直接箱館に集荷されるようになったのでした。高田屋嘉兵衛の択捉漁場開発もこうした状況下で幕府の命令によって行われたのでした

ここで、北洋漁業の先駆者、高田屋嘉兵衛(1769～1827)の生涯をたどってみたいと思います。嘉兵衛は、明和6年(1769)、淡路国百姓弥吉の長男として生まれています。<北海道開拓使設置のちょうど100年前です。> 嘉兵衛は、貧しい8人家族の長男として、12歳の時奉公に出ます。淡路島の奉公先雑貨商「和田屋」で商売のコツを学び、寛政2年(1790)21歳の時、兵庫港に出て舟稼ぎをやり、24歳で沖船頭となり回曹業を営むようになります。寛政8年(1796)3月、「辰悦丸」(1,500石積)を新造して、27歳ではじめて船主となり、箱館港に入港。その後南千島・国後・択捉との交易・開発事業のため運航することになります。



[写真] 辰悦丸 1500石積<約150 吨> (20分の1模型)

札幌市教育文化会館ロビー展示 <札幌アカシヤライオンズクラブ寄贈>(昭和56年)

以後、蝦夷地の産物との交易のため毎年箱館に来港するようになります。寛政10年(1798)には弟金兵衛を支配人として箱館大町に支店を設け、5艘の所有船で兵庫・大阪・下関と箱館を往復するようになります。寛政12年(1800)高田屋嘉兵衛は、弟金兵衛とともに辰悦丸に乗り、6艘を率いて択捉島へ渡り、17ヶ所の漁場を開くことに成功します。

その後、嘉兵衛は、官船5曹の建造を命じられ、ただちに大阪に下ってこれを造船し、翌享和元年(1801)4月箱館と兵庫を拠点に「蝦夷地定雇船頭」として官船及び官雇船のすべてを一手に支配して、千島方面の運航に当たっ



たといわれます。帝政ロシアの最初の遣日使節としてラクスマンが寛政4年(1792)根室に来航、翌年6月江戸幕府宣諭使との会見を求めて松前に来航しますが、松前藩は長崎が外国との交渉窓口であるとして、ロシア側の信書を受理していません。そして、文化元年(1804)、ロシア使節レザノフが食糧補給のため、日本との通商を要求して長崎に来航しますが、幕府は鎖国を理由に、通商を拒絶。その結果、文化3~4年(1806~1807)ロシアは樺太・択捉を襲撃します。その後幕府は西蝦夷地も直轄し、南部・津軽藩さらに秋田・庄内藩からも出兵を命じて警備を強化しています。

#### ■ゴロウニンが補縛され、函館・松前へ

こうした日露の緊張下で、文化8年(1811)5月4日、千島測量中のロシア船ディアナ号艦長ゴロウニン海軍少佐以下8名が国後島に上陸したところを、幕府役人が捕縛するという事件が起きました。ゴロウニンらは、根室から陸路護送されて7月箱館に着き、8月松前へ移され、2年3ヶ月拘禁されることとなります。ゴロウニンは、帰国後の「日本幽囚記」で、松前と箱館での2年3ヶ月余りの幽閉生活で出会った日本人の印象について「天下で最も教育のある国民である。日本には読み書きのできない者や、自分の国の法律を知らない者は一人もいない」と述べています。同じ文化8年(1811)8月14日、高田屋嘉兵衛は、観世丸で択捉から箱館への帰路、国後ケラムイ岬沖で、ディアナ号のリコルド副艦長に発見され、ロシア側に拿捕されます。

こうして、嘉兵衛が、随行の5人と一緒にカムチャツカに翌年春まで拘束される事件がおこります。しかし、その拘束期間、嘉兵衛は、その率直さと正直な態度でリコルドの信頼を得るようになったといわれます。文化10年(1813)5月、リコルドは、嘉兵衛らを連れて、国後で幕府とロシア側の交渉を開始します。嘉兵衛は、人質としてではなく、調停役として、カムチャツカで学んだロシア語を駆使して、日露の交渉・調停に尽力し、ゴロウニンの釈放と高田屋嘉兵衛自身の帰還が実現します。このゴロウニン事件を機に、ロシアとの関係は改善され、緊張状態は緩和されたといわれます。その結果幕府は、直轄していた蝦夷地を文政4年(1821)、松前藩に返しています。この嘉兵衛の努力によって、その後の日露の交易も好転して盛んになりました。嘉兵衛は、こうして箱館の町を発展させ、北洋漁業のみならず日露の民間外交の基礎を築いた人物として高く評価されています。しかし、嘉兵衛は、このロシアの抑留生活で、体調をくずしたといわれ、5年後の文政元年(1818)50歳の時、箱館の店と高田屋の事業すべてを弟に譲り、22年間滞在した箱館を去りました。その後、郷里淡路島で余生を送り、文政10年(1827)、59歳で、この世を去りました。

その後高田屋は、天保2年(1831)、ロシアとの交易について、幕府の嚴重な取り調べを受け、結果的に所有船12隻すべてを没収され、船家業差し止め、所払いの処分を受けて没落の悲運をたどっています。

現在、函館市の宝来町に高田屋嘉兵衛の銅像と、高田屋嘉兵衛資料館があります。また根室市の金毘羅神社にも銅像が建てられています。平成11年(1999)、高田屋嘉兵衛とゴロウニン、リコルドの子孫が松前・函館を訪れて、それぞれに先祖の事績に思いをめぐらせたといわれます。

#### ■松前藩から北海道へ

嘉永6年(1853)6月3日ペリー艦隊が浦賀に来航します。そして翌年再来日、3月3日に日米和親条約が締結され、下田・箱館(2港)の開港が決定されました。条約締結後4月、ペリー一行は箱館にやってきました。同年8月、ロシアのプチャーチンの軍艦ディアナ号が来航、下田で条約交渉時の11月4日大地震でディアナ号が大破したため、幕府が代りの船を建造するという出来事もありました。これに対して後日、ロシア側から幕府へディアナ号の大砲が返礼として寄贈されています。

安政2年(1855)の箱館開港を控え、箱館奉行の役所と住居の建設が急務となります。結局、武田斐三郎が設計担当した「五稜郭」が、ヨーロッパの城塞都市をモデルとして7年の歳月をかけて建設されました。またその北側

に箱館奉行所に勤務する役人約 400 人の住宅(長屋)が半分ほど建てられたといわれます。「五稜郭」が奉行所として使用されたのは、約 4 年間でした。幕府崩壊、箱館戦争を経て、その後、明治 4 年(1871)には、開拓使によって取り壊されることとなります。安政 6 年(1859)に貿易港として開港した箱館は、欧米にも広く知られ、ロシア人やアメリカ人、イギリス人、フランス人などとの異文化交流、諸外国のさまざまな舶来品が流通する国際都市であったといわれます。

明治元年(1868)1 月の京都の鳥羽伏見の戦いにはじまる戊辰戦争は、2 月上野の彰義隊の戦い→8 月会津戦争・飯森山(白虎隊自刃)→そして翌年 5 月の箱館戦争で終わります。明治 2 年(1869)7 月、明治政府により開拓使が設置され、「北海道」と改称して新時代を迎えることとなります。

---

#### <参考文献及び参考資料>

- ・「新版北海道の歴史」下 関秀志・共著 北海道新聞社 ・「北海道の歴史」榎本守恵著 北海道新聞社 ・「ほっかいどう百年物語」STV ラジオ編 中西出版 ・「北海道の歴史散歩」北海道高等学校日本史教育研究会編 山川出版社 ・「函館歴史文化観光検定公式テキストブック」同作成委員会 函館商工会議所 ・その他インターネット資料など
-

**新企画** 三笠バスツアー1日コース………北海道の石炭と鉄道の歴史発見の旅

**平成20年度 第1回 国際交流ランチセミナー in 三笠 (案)**

—クロフォード公園・三笠鉄道記念館・三笠市立博物館・三笠山コース—

日時 平成20年6月28日(土) 8:00～18:00 (実施予定)

コース 札幌NHK前出発(三笠市へ)クロフォード公園(旧幌内太駅舎) - 三笠鉄道記念館 - 旧幌内炭鉱跡(音羽坑口)(立坑) - <昼食会> - 三笠市立博物館 - 三笠山(観音山)三十三観音めぐり - 札幌帰着

参加費 会員・学生 3,500円 一般 4,000円 (昼食代・資料代・写真代・バス代)

< 入館料(団体料金) 鉄道記念館 420円・博物館 300円は、マ州協会負担 >

★三笠の歴史は、早くから注目されていた幌内川や幾春別川上流の石炭層が明治6年(1873)、開拓使顧問ホーレス・ケブロン(1804～1885・米マサチューセッツ州出身)の石狩炭田等の資源調査を受けて、ベンジャミン・S・ライマン(1835～1920・米マサチューセッツ州出身)が幌内川上流を精密調査して石炭埋蔵量の良質で豊富なことを建言したことにより近代化の歴史が加速します。開拓使は、明治10年(1877)幌内炭山の開坑を決定します。

★明治11年(1878)、ジョセフ・U・クロフォード(1842～1924・米ペンシルバニア州出身)が幌内鉄道建設の技師長として招かれ、幌内から小樽までの石炭輸送を目的とする手宮—札幌間(明13,11開通)、札幌—幌内間(明15,11)の「幌内鉄道」を完成させます。こうして三笠の歴史の歯車が大きく動き出しました。しかし炭坑発展のかけには、樺戸集治監(明14設置)に次いで、空知集治監(明15—明34)が三笠に設置されて、多くの囚人が道路建設やガス爆発・落盤事故の多発する坑内作業に使役された過酷な歴史もありました。これらの歴史は「三笠鉄道記念館」「三笠市立博物館」で学習することができます。

★桂沢湖(桂沢ダム、昭和32年完成)周辺に分布していた白亜紀の地層からは多くの化石類が発掘されており、天然記念物「エゾミカサリユウ」(愛称リユウちゃん)等の恐竜化石類や、約3,000点のアンモナイト等が「三笠市立博物館」に展示・収蔵されています。なお、桂沢湖畔に、復元された約7メートルのリユウちゃんが立っています。

★山容が奈良の三笠山に似ていることから古くから「三笠山」(113m・標高差76m)とよばれている山があり、大正2年(1913)大凶作の後、村の有志が豊作を祈願して大正4年(1915)西国33ヶ所の霊を写して、33観音を建立したことから「観音山」とも呼ばれて信仰の山となっています。

★明治39年(1906)、幌内、幾春別、市来知(いちきしり)の三村合併のときにこの山の名をとって「三笠山村」となりました。そして昭和17年「三笠町」となり、さらに昭和32年「三笠市」となって今日に至っています。

今回は、1日バスツアーとして、北海道の石炭と鉄道・北海盆唄発祥の地「三笠コース」を企画しました。米国マサチューセッツ州からの短期交換留学生グループや北大留学生・小樽商大留学生・札幌国際センターJICA研修生などの各国ゲストと一緒に、異文化ふれあいの旅「国際交流セミナーツアー」の1日を楽しんでいただきます。

## 十勝開拓のパイオニア・・・依田勉三の苦闘の生涯 —「ケブロン報文」・札幌農学校フロンティアスピリッツに触発されて—

「晩成社」は、北海道の開拓を目的として明治 15 年(1882)1 月、静岡県伊豆大沢村(現在の松崎町)の豪農依田一族を中心に結成されました。中心となったのは、三男依田勉三と学友渡辺勝、鈴木銃太郎の三人でした。

依田勉三が北海道開拓の意志を固めたのは、慶応義塾に入学して福沢諭吉の薫陶を受けて開拓報国の念をいただくようになり、さらに「ケブロン報文」とクラーク博士の「札幌農学校」の新風の強い影響であったようです。勉三の明治 14 年・15 年現地視察の後、「晩成社」移民団の一行 13 戸 27 名がオベリベリ(帯広村)に入植したのは明治 16 年(1883)5 月のことでした。開墾は干ばつ、長雨、害虫などに見舞われて難渋をきわめるもので、多くの脱落者がありました。しかし勉三は、明治 19 年(1886)には大樹町に当縁(とうべり)牧場を開いて酪農に取り組み、さらに明治 28 年(1895)ころから水稻の試作を重ねて、幕別村に晩成社途別農場をスタートさせています。その後、明治 35 年(1902)にはバターなどの製造を開始、さらに 3 年後に練乳工場やサイロを構築、明治 44 年(1911)には缶詰工場も創業するなど、多くの苦難を乗り越えさまざまな事業に着手しています。しかし、いずれも事業としては実りのないままに、勉三は晩年中風に倒れ、大正 14 年(1925)12 月 12 日、73 歳の生涯を閉じます。いまは、帯広市共同墓地に眠っています。「晩成社」の事業としては、失敗の連続であったといわれます。しかし今日、依田勉三の苦闘は十勝農業のパイオニアとして高く評価されています。

今回は、この不退職の決意で、北海道十勝の開墾に生涯を捧げた「依田勉三」にスポットライトをあててみたいと思います。

### ■まえがき

蝦夷地(北海道)には、古くからのアイヌ民族の豊かな歴史と文化がありました。しかし、アイヌ民族は文字記録を持たないために、その歴史は、遺跡からの出土品や、アイヌの伝承、そして 13 世紀頃からの和人(シサム・シャモ、日本人)との交易の歴史などを通して、和人の視点から記述されたものから推定するだけで正確なところはわかりません。

江戸時代末期になって、近藤重蔵(1771~1829)の東蝦夷・択捉島の探検(1798 年「大日本恵土呂布」の標柱を立てる) <1799 年、幕府の東蝦夷地直轄化>や伊能忠敬(1745~1818)の蝦夷測量(1800)、続いて最上徳内(1754~1836)や富山元十郎などの千島列島探検(1801 年「天長地久大日本七属島」の標柱を立てる)などがありました。 <1802 年、幕府、蝦夷奉行を置く、後に箱館奉行となる。>

その後、ロシアのニコライ・レザノフが日露通商を要求、続いてロシアの択捉島・樺太上陸による略奪、放火(フォボストツ事件)などがあり、幕府は警備を強化します。1807 年、西蝦夷地を直轄化、箱館奉行を廃止して松前奉行を置きます。1808 年、幕府が最上徳内(1754~1836)、松田伝十郎、間宮林蔵(1775~1844)を相次いで樺太に派遣します。(この時、松田伝十郎が樺太最西端ラッカ岬に「大日本国国境」の標柱を立てたといわれます。)

その後、ゴローニン捕捉事件(1821~1823)と高田屋嘉兵衛の活躍などがあり、日露関係の緩和

を受け、幕府は蝦夷地を松前藩に返還。1854年日露和親条約締結、北海道は日本領、得撫島(ウルップ島)以北の千島列島がロシア領に決まりますが、樺太方面の国境は未確定でした。1865年岡本監輔が樺太最北端ガオト岬に至り「大日本領」と記した標柱を立てたといわれます。しかし、日露関係は緊張のまま新しい時代を迎えます。

明治元年(1868)1月の京都鳥羽伏見の戦いにはじまる戊辰戦争は、2月上野の彰義隊の戦い→8月会津戦争・飯森山白虎隊自刃→そして翌年5月の箱館戦争で終結します。明治2年(1869)7月、明治政府により開拓使が設置され、「北海道」と改称して新時代を迎えることになります。

明治政府は北海道開拓とロシアの南下に対する北方警備のため、移民政策をすすめます。屯田兵(有事には軍隊となる開拓民)の募集も開始し明治8年(1875)5月には、琴似屯田兵村に、仙台亘理藩・会津斗南藩・庄内藩士族の第1陣965人が入植しています。以後北海道には最終的に37の兵村ができ、合計約4万人が入植します。〈明治37年(1904)屯田兵制度廃止〉

明治10年(1877)以降、北海道移住の新しい流れの一つとして、失業士族対策の結社移民があります。明治12年(1879)、和歌山県士族岩橋徹輔の「開進社」による道南の乙部、長万部、岩内への入植。次いで明治13年(1880)、兵庫県士族鈴木清の「赤心社」による日高の西舎、荻伏への入植、さらに明治19年(1886)新潟県「北越植民社」の野幌入植などが続きます。ここでは、明治16年(1883)5月、十勝に入植した依田勉三の「晩成社」の苦闘の歴史をいろいろな資料を参考にご紹介したいと思います。

#### ■依田勉三の生立ち

依田勉三は、ペリ一來航の嘉永6年(1853)5月15日、伊豆国那賀郡大沢村(現在の松崎町)の豪農依田善右衛門の三男として生まれています。長男佐二平(二男は夭折)。三男勉三の幼名は久良之助。兄弟姉妹11人。依田家は、もと甲斐武田勝頼の重臣でしたが、天目山の戦いで織田軍に敗れた後、大沢の地に帰農したといわれます。

勉三は幼くして両親と死別し、7歳年長の兄佐二平に養育されます。漢学者の養伯父土屋宗三郎(三余)が開いていた「三余塾」で漢籍を学びます。〈安政6年(1859)7歳のとき三余塾入門、久良之助から勉三に改名。〉幕末の伊豆は二宮尊徳の農本思想の影響が強く、この幼少時代から三余塾で、農本思想と開拓精神が勉三に植えつけられたものと思われます。明治5年(1872)8月、「謹申学舎」(塾長は元会津藩家老西郷頼母)に入塾。そこで、幕末の二宮尊徳が幕府から蝦夷地開拓の要請を受け、その門下生の大友亀太郎が開墾事業に活躍したことや函館戦争で官軍に敗れた榎本武揚の「蝦夷共和国」構想の話などを聞いて刺激を受けたといわれます。後、上京し、明治7年(1874)22歳のとき慶応義塾に入学して福沢諭吉の薫陶を受けます。福沢諭吉は独立自尊を説き、人口激増・食料不足を補うために北海道を大いに開拓すべきことも語ったようです。〈また諭吉は、友人榎本武揚の助命嘆願にも努めています。〉勉三はしだいに開拓報国の念を強くし、明治8年(1875)すぐれた北海道開拓の全体構想を示した「ケブロン報文」(明治4年・明治6年・明治8年)「報文要略」(明治8年)に出会い、北海道開拓に生涯を賭ける決意を固めたといわれます。同年末、洋学勉強のため、英国人牧師ヒュー・ワッデル(1840~1901)の「ワッデル塾」で英語を学びます。そしてこの英学塾で、後の「晩成社」の3幹部となる依田勉三(24歳)・鈴木銃太郎(21歳)・渡辺勝(23歳)の出会いがあったようです。勉三はその後脚気と胃病のため中退して郷里に戻ります。

兄佐二平は、後に郡長、銀行頭取、汽船会社社長、国会議員などの要職を努めた人物ですが、この兄佐二平を手伝い洋学校の創設に尽力、明治12年(1879)1月15日に私立「豆陽学校」(現在の下田北高校)として開校、学校経営を助けます。佐二平が校長、渡辺勝を教頭として招き、勉三は教諭になります。この年4月、勉三26歳は義妹リク16歳と結婚します。勉三は教鞭をとるかたわら、開拓使次官後に長官となった黒田清隆が招聘したケプロンの視察報告書(730頁)を読んだり、新しい札幌農学校の様子を聞き及ぶにつけ、北海道開拓への思いに若き青春の血の沸き立つのを覚えたといわれます。

#### ■晩成社の設立へ

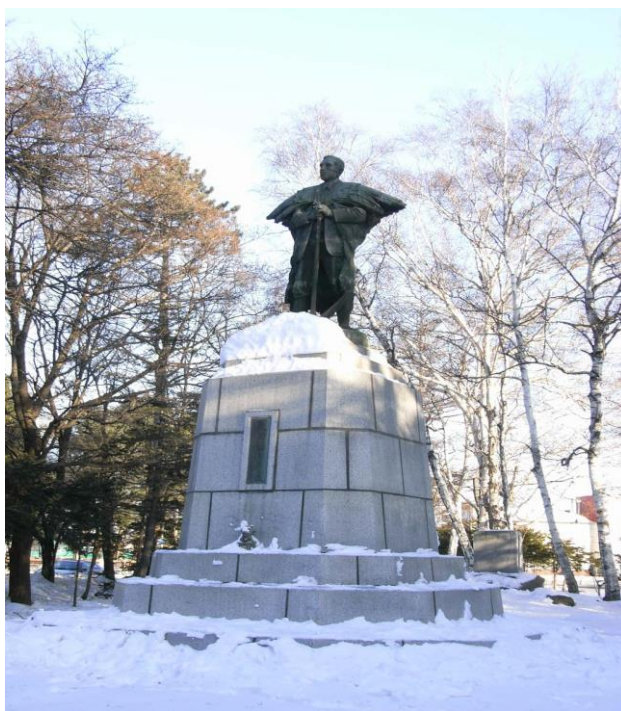
勉三は明治14年(1881)8月17日28歳、単身北海道へ渡り現地調査をしています。当時、北海道は石狩原野の開拓中心で、開拓使の役人は、札幌付近の苗穂村を推薦しています。しかし、勉三はこの申し出を断わり、十勝地方を中心にして道内各地を視察しています。そして伊豆に帰ると、十勝が将来性に富む土地であることを一族に力説し、明治15年(1882)1月、北海道での農場建設を目的とする「晩成社」(資本金5万円、今日の150億円に相当する大金)を設立したのです。兄佐二平社長、勉三副社長。社名は「大器晩成」に因み、開拓には長い時間がかかるが、必ず成功してみせるといふ願いをこめたものといわれます。渡辺勝と鈴木銃太郎は、ワッデル塾以来の親友で、のちに晩成社の3幹部として十勝の広野で共に活躍することになります。明治15年(1882)5月、勉三は鈴木銃太郎と共に、再度、札幌県庁に土地貸し下げ手続きのため来道しています。〈当時の北海道は、明治15年2月開拓使廃止、札幌県・函館県・根室県の三県となり、明治19年1月三県廃止、北海道庁設置。という状況〉開拓使時代から勉三の十勝開拓に協力した内田瀨技師(札幌農学校一期生)の骨折りなどで、十勝原野の中心部に「晩成社」入植の土地が決まったのでした。明治政府から未開地の無償払い下げを受け、今後15年間で一万町歩を開墾するという壮大な計画を立てています。7月16日、十勝川をさかのぼり帯広村に着き、開墾予定地を定めて、鈴木銃太郎は帯広に1人残り、勉三は伊豆へ帰国しています。当時の帯広はアイヌが10数戸約50人と和人が1戸あっただけといわれます。銃太郎はアイヌに助けられて豆や麦などを栽培して、一冬を越し、移民団の到着を待ちます。一方静岡では渡辺勝が移民募集をしていました。

#### ■「晩成社」移民団の入植・開墾

明治16年(1883)4月9日、出発前日渡辺勝(29歳)と銃太郎妹鈴木カネ(25歳)との結婚式を勉三(30歳)・リク(20歳)夫妻の媒酌で行います。そして依田勉三(30歳)を団長とする「晩成社」移民団の一行13家族27名は、4月10日出発します。勉三・リクは2歳の俊介を義姉ふじに預けますが約半年後に夭折しています。一行は汽船「高砂丸」で横浜港を出港、4月14日函館に到着。その後陸海二手に分かれて帯広に向かいます。陸路隊は依田勉三隊長以下16人、海路隊は渡辺勝隊長以下11人で、それぞれ苦難の末、1ヶ月後の5月14日オベリベリ(わき水の流れる口の意・現在の帯広市)に着いています。全員が揃ったのは、5月20日でした。こうして、1年前から十勝に1人残って越冬していた鈴木銃太郎を含めて14戸、28人が最初の入植者となりました。「晩成社」移民団の中心となった勉三、銃太郎、勝・カネといった人たちは、当時の移民の中では数少ない高学歴のインテリでした。彼らは、入植後の苦闘の生活の中でも「ケプロン報告書を読む」「聖書を読む」「新聞を読む」という記述がその日記に、克明に書かれています。彼らは、なんと「ケプロン報文」や「聖書」を携えて入植した教養人でした。

明治16年(1883)、十勝開墾に入植した一行は、干ばつに加えて、野火、イナゴの大群、兔、鼠、鳥な

どの被害でほとんど収穫がなかったといわれます。この年 10 月 17 日に遅れて鈴木親長(53 歳)・カネ親子、勉三の弟文三郎などが入地しています。親長・銃太郎・カネ、渡辺勝は洗礼を受けた熱心なクリスチャンでした。この信仰心が未開地入植の大きな精神的支柱になったようです。勝と結婚したカネは横浜の共立女学校(ミッションスクール)英学部を出た才媛で、入植後は、熱心に社員とアイヌの子供たちにも読み書きを教え、「十勝開拓の母」と称されたそうです。〈教え子の山本金蔵が札幌農芸伝習所に学び、その時送った大豆数粒が、後の十勝一大生産物となる。〉明治 17 年(1884)もまた絶望的な状況で、開墾は遅々として進まなかったといわれます。当時の帯広は奥地すぎて陸の孤島に等しく、勉三が大津(現在の豊頃町)に貯蔵してあった米の輸送も困難な状況でした。〈帯広～大津間の道路は、十勝集治監の囚人労働によって明治 26 年(1893)になってやっと開通しました〉この飢餓の中で、勝が「落ちぶれた極度か豚とひとつ鍋」と詠んだのを、勉三が「開墾の始めは豚とひとつ鍋」と改めた歌は、今日も広く知られています。この間、多くの脱落者が出てたため、勉三は繰り返し開拓の精神訓話を試みたといわれます。妻リクは病氣療養のため明治 18 年(1885) 9 月 勉三に函館まで送られて伊豆に帰ります。翌明治 19 年(1886)帯広視察に来た依田佐二平に銃太郎が、晩成社改革を提言するも拒否されて、幹事を辞任しています。その後、銃太郎(31 歳)はアイヌの酋長娘コカトアン(21 歳・常盤と改名)と結婚して晩成社を去り、明治 22 年(1889)からシプチャ(現在の芽室町)に定住、農場を開いて芽室町の草分けとなったといわれます。渡辺勝も明治 26 年(1893)から帯広を離れて、然別村(現在の音更町)に定住し、牧場経営をはじめています。



帯広神社前中島公園にある依田勉三の銅像 ( 2008 年 1 月撮影:帯広百年記念館提供 )

### ■生花苗(おいかまない)の酪農経営

明治 19 年(1886)5 月、このまま帯広には社業が不成功に終わることを心配し、勉三は弟の文三郎とともに、食料不足打開のため、帯広から約 40 キロ離れた当縁(とうべり)村生花苗(おいかまない)(現在の大樹町晩成)に牧場を開いて酪農に取り組みます。明治 35 年(1902)にはバターなどの製造をはじめ、3 年後には練乳工場やサイロを建て、明治 44 年(1911)には缶詰工場も創業するなど、この牧場でさまざまな事業に自らの損失を忘れて着手しています。しかし、晩成社の経営としては上手くいかなかったようです。

この間に、明治 20 年(1887)には、弟文三郎が伊豆へ戻り翌年病没しています。そして明治 22 年(1889)に妻リクが 4 年間伊豆で療養して帯広に戻っています。明治 25 年(1892)頃には、ようやく状況も好転し食料も足りるようになり、小豆・大豆の収穫もめどがつくようになったといわれます。しかし、晩成社設立当初の 15 年で 1 万町歩を開墾しようという目標には遠く及ばず、10 年かかって 30 町歩を開墾するのがやっとでした。同年(1892)11 月、依田佐二平・勉三兄弟が緑綬褒章を授章したのを機に、奮起して晩成社の事業拡大を計画。明治 27 年(1894)函館に「丸成牛肉店」を開業して 6 年間滞在します。この年病気再発のリクと「愛ある」離婚、療養のため伊豆へ帰っています。その後世話する人があって、翌年函館生まれで二人の娘を持つ馬場サヨと再婚しています。勉三・サヨの間に千世という男子が生まれますが、わずか二ヶ月で病死、勉三は結局実子には恵まれていません。養子は数名いたようで、後に嫡子とした佐藤八百をキク(養女)と結婚させています。その後さらに、当別村に畜産会社を設立、帯広には木工場を作り然別村(現在の音更町)にも牧場を開いています。

### ■途別農場の稲作成功

このころ、勉三は、北限の地で水稻の試作を重ね、明治 33 年(1900)には幕別町途別(現在の幕別町)に「晩成社途別農場」をスタートさせています。明治 37 年(1904)には、冷害に強い黒毛品種「香(におい)早稲」を発見したのです。そして、明治 40 年(1907)ころには 30 町歩の水田を作りますが、冷害・凶作が続いたため多くの小作人が去り残ったのは、勉三と 2 人の小作人だけになったといわれます。しかし勉三は決して希望を捨てず、大正 4 年(1915)からはサヨとともに途別の掘建小屋に住み込んで、排水溝・水路の改修、小作小屋の改築などの基盤整備に取り組みます。この時、実に 5 年がかりで約 8 キロメートルに及ぶ灌漑溝を完成させています。この地道な努力を続けて、少しずつ水田経営も軌道に乗るようになったのです。しかし、晩成社の経営きびしく、大正 5 年(1916)には売買(うりかり)農場<帯広南東部>等を売却します。

大正 9 年(1920)11 月に、勉三は途別農場の一応の成功を記念して祝宴を開いています。久しぶりに鈴木銃太郎や渡辺勝など晩成社同志 12 人が顔を合わせて、勉三の成功を心から祝ったといわれます。この時、勉三は 68 歳になっていました。苦難つづきの晩成社の開拓の歴史の中で、この日だけが勉三最良の日であったといわれます。しかし、至福の時は束の間で、勉三には晩成社の所有地売却など経営難の苦勞が続きます。

### ■勉三倒れる

勉三は、大正 13 年(1924)、春より中風にかかります。9 月 16 日、看病疲れで、サヨが先立ちます。その後リクが伊豆から来ますが、勉三と口論となり 12 月に再び伊豆に戻っています。<この年 10 月 15 日、兄佐二平没。>その後病勢は日ごとに悪化して、大正 14 年(1925)12 月 12 日、十勝開拓 45 年に苦闘の生涯を捧げた依田勉三は、帯広町西 2 条 9 丁目の自宅で、「晩成社にはなにも残らん。しかし、十勝



野には・・・」と語り静かに息を引きとったといわれます。享年 73 歳でした。リクは養子政雄を伴って葬儀に来て、嫡子八百夫妻の世話でそのまま広尾に住み約 9 年後の昭和 10 年(1935)11 月 3 日、73 歳の薄幸な生涯を閉じ、八百の手によって葬儀が行われたということです。<鈴木銃太郎は大正 15 年(1926)6 月 13 日 71 歳没。渡辺勝は大正 11 年(1922)6 月 15 日 69 歳没。カネは昭和 20 年(1945)12 月 1 日 83 歳没。>

■「晩成社」十勝開拓の遺産

晩成社設立当初の 15 年間の開拓目標は、その後 25 年に延期され、借金も雪ダルマ式に増えて大正 2 年(1913)には当時のお金で負債額 17 万 8 千円に達したといわれます。さらに 50 年に引き延ばされても成功せず、昭和 7 年(1932)、創業 50 年満期となり莫大な負債をかかえて倒産同様に解散しています。晩成社員に残された土地も、出資者への配当もなく、勉三所有の土地も一坪もなく、すべて自作農への開放と借財の返済にあてられたのでした。しかし、勉三が、若き日、慶応義塾の福沢諭吉の薫陶を受け、ケプロン報文に出会って北海道開拓の決意を固めた「ますらをが心定めし北の海風吹かば吹け浪立たばたて」の決意は、入植以後約半世紀すこしも揺るがず、十勝開拓の先駆者として、開拓済民の使命感をもって困難な開墾作業にあたり、さらに役所の手続き、農作物の種子肥料・牛馬豚の買い付け、小作人集めなどに東奔西走した苦闘の生涯は、今日のあらゆる十勝産業の基盤整備の「礎」と高く評価されています。

[補足資料]

伊能忠敬(1745~1818)は、1800 年(寛政 12) 56 才のときの蝦夷地測量から 72 才まで、10 回に及ぶ日本全国の測量をして、有名な「大日本沿海輿地全図」完成(没後 1821)しています。
間宮林蔵(1775~1844)は、伊能忠敬に測量を学び、西蝦夷地、択捉島、松田伝十郎に従って樺太を探索、1809 年(文化 6)には単身海峡「間宮海峡」(タタール海峡)を渡り樺太が島であることを確認したといわれます。
松浦武四郎(1818~1888)は、1844 年蝦夷地探検に出發。その探査は北海道各地、択捉島や樺太にまで及び、1855 年「東西蝦夷山川地理取調図」を出版しています。後に 1869 年開拓判官となり、蝦夷地を「北海道」と命名、アイヌ語の地名をもとに北海道各地の国名・郡名を選定しています。

<参考文献及び参考資料>

「十勝開拓史」萩原寛編 名著出版 ・「帯広市史」帯広市 ・「依田勉三の生涯」松山善三著 ・「北海道の歴史」榎本守恵著 北海道新聞社 ・「星霜 2 北海道史明治 2 1875-1985」北海道新聞社 ・「ほっかいどう百年物語」STV ラジオ編 中西出版 ・「明治の群像 8 開拓と探検」高倉新一郎編 三一書房 ・「北海道の歴史散歩」北海道高等学校日本史教育研究会編 山川出版社 ・「風吹け、波立て」松本晴雄著 ・映画「新しい風ー若き日の依田勉三ー」(平成 15 年)松竹映画 DVD ・その他インターネット資料など

\* 依田勉三の出身地静岡県松崎町の歴史研究家松本晴雄氏より貴重な諸種の資料提供・ご教示を頂きました。

### 依田勉三を記念するもの

#### ■「途別水田の碑」・「徳源地」の碑

依田勉三が北限の水稲の試作を重ね、明治 33 年(1900)にスタートさせた「晩成舎途別農場」(現在の幕別町依田地区)。苦労の末黒毛品種の栽培に成功して大正 9 年(1920)11 月、この地で祝宴を開いています。この碑は大正 9 年(1920)9 月晩成社によって建てられたもの。この地を「徳源地」と命名しています。兄依田佐二平の撰文で、道北地区に元禄時代に入植した伝長坊の努力、その師佐藤信景のことを述べ、晩成社の勉三が長年苦労の末稲作成功の今日を迎えた功績を讃えている。(碑文は漢文表記)

#### ■依田勉三の銅像

晩成社所有地跡、現在は帯広神社前中島公園に立てられています。帯広出身の歌手中島みゆきの祖父中島武市が土地と銅像建立の費用すべてを負担して完成させたもの。彫塑者田嶋碩朗(たじませきろう)は北大のクラーク胸像の制作者でもあります。完成除幕式は昭和 16 年(1941)6 月 22 日。しかし太平洋戦争中金属献納で供出、現在のものは昭和 26 年(1951)7 月に再建されたものです。

(碑文) <撰文は初代北大総長 佐藤昌介>

#### 功業不磨

依田勉三君ハ伊豆ノ人、夙(つと)ニ北海道開墾ノ志アリ、明治十五年晩成社ヲ組織シ自ラ一族ヲ率キテ此地ニ移住ス、凶歳相次キ飢寒身ニ迫ルト雖モ肯テ屈撓セス移民ヲ慰撫激励シテ原野ノ開拓ニ努メ東ニ水田ヲ開キ、酪農事業ヲ興シ諸種ノ製造工業ヲ試ムル等十勝開発ノ翹楚トシテ克ク其ノ範ヲ示ス十勝国ノ今日在ルハ君ノ先見努力ノ賜ナリ岐阜県人中島武市、此ノ勞効ヲ欽仰シ、私財ヲ投シテ之ヲ永遠ニ讃ヘントス誠ニ宜ナリト言フヘシ

#### ■「北海道開拓神社」37 番目の祭神となる

北海道神宮境内の「開拓神社」は、昭和 13 年(1937)8 月 14 日、本道開拓に貢献した 36 柱の祭神を祀るため建立されました。戦後になって札幌市議会議長福島利雄、三原武彦(写真家鈴木真一の孫)などが中心になって十勝開拓の祖、依田勉三の合祀運動を起こして、昭和 29 年(1954)9 月 22 日、37 柱目の祭神として合祀されました。

#### ■「依田勉三翁頌徳之碑」(幕別町依田地区)

十勝開拓の先駆者依田勉三の功労を讃えて、「十勝晩成会」が十勝開田の地である依田部落、「徳源地」に、昭和 59 年(1984)11 月に建設したもの。(碑文) <撰文は十勝晩成会副会長 棚瀬善一>

#### 頌徳之碑の由来

十勝開拓の先駆者、依田勉三翁は嘉永六年五月十五日、伊豆国那賀郡大沢村に生れ、大正十四年十二月十二日帯広町西二条十丁目の自邸で逝去された。享年七十三才である。

依田家は伊豆屈指の旧家豪農で祖先は甲斐の武田氏に仕えた武家であったが、のち伊豆国那賀郡に帰農した。翁は幼少より漢学者土屋宗三郎の三餘塾に学びまた旧会津藩家老保科正恵の謹申学舎で教をうけた。長じてワッデル塾に入り語学を修めこの時後に晩成社幹部となった。

鈴木銃太郎、渡辺勝の両氏と交わりを深めた。上京して慶応義塾に学び、福沢諭吉先生の薫陶をうけ、さらにその頃伊豆地方は二宮尊徳翁の農本思想の影響がありその感化をうけ、開拓報国の雄志を抱くようになった。明治十四年、北海道開発の宿志を家人に語り同意を得て単身本道開拓地を探査した。翌十五年一族で晩成社を組織し副社長となり、鈴木銃太郎氏と再度渡道し十勝

川をさかのぼり、原始境であった帯広を開拓地と定めた。明治十六年翁は渡辺勝氏と開拓団一行を率いて入地し筆舌につくせぬ苦難な開墾が始められた。以来半世紀近く翁は絶望を知らぬ志をもって失敗を重ねつつも次々と事業をおこし、今日十勝におけるあらゆる産業の源流ともいえる事業に心血を注いだのである。

このたび多年の念願であった翁の功績を顕彰感謝するとともにまた十勝開拓につくされた幾多の先覚者の功労にもおおいをいたしここに頌徳之碑を由緒深き徳原地に建設のはこびとなった。

翁の十勝開田の地である依田部落、徳原地組合十勝晩成会幕別町と相計り協賛の方々の賛同を得て建設したことを記す次第である。 昭和五十九年十一月二十三日

おいこまない

#### ■晩成社史跡(大樹町生花苗)

十勝開拓の祖と呼ばれる依田勉三がこの地に牧場を開いたのは明治19年(1886)。復元された住居や句碑があります。「依田勉三翁住居」は、明治26年(1893)～大正4年(1915)まで勉三が住んでいた住居で、平成元年(1989)10月に復元されたもの。また勉三が食料不足のため牛20頭を死なせた供養の「祭牛之霊碑」や勉三の「ふみまなぶ 学び子らが うえおきし 園生のもみじ にほひそめけり」と詠んだ「もみじひら」の歌碑、サイロ跡などがある。

#### ■「帯広発祥の地」の碑

帯広川の河畔、現在の国道38号線と南6丁目線が交差するあたりに建っています。勉三の「開拓の始めは豚とひとつ鍋」の歌も刻まれています。

■昭和53年(1978)5月、帯広市と静岡県松崎町、「開拓姉妹都市提携」を結ぶ。

■映画「新しい風―若き日の依田勉三―」(松竹映画配給)

平成15年(2003)作成。帯広開基120年記念。第38回ヒューストン国際映画祭グランプリ受賞。

#### ■十勝開拓の祖 依田勉三に因む「六花亭」(本社帯広)のお菓子

- ①「マルセイバターサンド」 北海道産のバターを主原料に、レーズンとホワイトチョコレートを合わせたビスケットでサンド。菓名は、明治30年代に十勝開拓の祖、依田勉三翁経営の牧場で作られたバターのラベル(包装紙複製)に因んでいます。
- ②「ひとつ鍋」 菓名は、依田勉三翁が開拓当時によんだ句「開墾のはじめは豚とひとつ鍋」に因み、お鍋をかたどった最中に餡と小さなお餅2個を入れたものです。
- ③「十三戸」 明治16年、帯広開拓のために依田勉三を団長とする晩成社移民団が入植した13世帯27名に因む。初雪の舞うわらぶきの民家をイメージしたもの。
- ④「万作」 バター、ミルク、卵を加えた桃山。開拓当時、春一番に咲く福寿草は「まず咲く」がなまって「万作」と呼ばれました。これは、依田勉三の「万作や 何処から鎌を おろそうか」の句に因んだもの。

## 北海道庁が招聘した北欧の外人模範農家

—札幌真駒内種畜場のモーテン・ラーセンと札幌琴似村農事試験場のエミール・フェンガー  
—十勝地区甜菜農家のフリードリッヒ・コッホ(十勝清水)とウイルヘルム・グラバウ(帯広)—

明治2年(1869)7月、明治政府の開拓使設置により、北海道の本格的な開拓がスタートしますが、明治3年(1870)5月、開拓次官となった黒田清隆は、北海道の開拓や農業経営の模範を米国に求めて、マサチューセッツ州出身の米国農務長官ホーレス・ケプロン(1804-1885)やオハイオ州で牧場経営をしていたエドウィン・ダン(1848-1931)などを招聘したのです。そして、各地に開拓団が入植して農業開拓がすすめられました。

しかし、北海道農業は、新しい肥沃な原野の開墾地での、無肥料連作を長年続けたために、大正時代に入って次第に地力が落ちてきたといわれます。大正6年(1917)、道庁農政担当者と札幌酪農組合畜牛研究会とが中心になって地力回復のための有畜農業の検討をはじめ、「北海道第2期拓殖計画」として、北欧の有畜農法を北海道農業経営の参考として取り入れることとなります。米国留学の酪農家の宇都宮仙太郎(1866~1940)、黒澤西蔵(1885~1982、酪農学園大学・現とわの森三愛高校の創立者)らの進言もあり、北海道庁(第16代長官、宮尾舜治)も主穀農業から主畜農業に転じたデンマークの大成功に注目していました。

大正11年(1922)から長期派遣で、道庁担当職員の山田勝伴・相原金治・神田不二夫と音江(現深川市)酪農組合長深沢吉平の4名の産業調査員がデンマークに派遣されていた間に、デンマーク模範農家招聘という道の方針が出て、その人選が進められることになりました。大正12年(1923)、北海道庁は、デンマーク人農家2戸、ドイツ人農家2戸を5ヵ年契約で招聘し、札幌近郊と十勝地区で模範経営を行わせることとしました。デンマークでは165名の応募者、ドイツでは8名の候補者の中から、4戸を決定。十五町歩農家としてデンマークのモーテン・ラーセン<33歳・4人家族>(札幌真駒内種畜場内耕地)、五町歩農家としてエミール・フェンガー<31歳・4人家族>(札幌琴似村農事試験場内耕地)、十町歩農家としてドイツのフリードリッヒ・コッホ<43歳・6人家族>(十勝清水)とウイルヘルム・グラバウ<30歳・4人家族>(帯広)の4家族が招かれることになりました。

### 真駒内種畜場の有畜農業十五町歩農家のモーテン・ラーセン

モーテン・ラーセン(1890~?)は、18歳から20歳までの間、商船学校に学び世界各国の見聞を広め、英語にもドイツ語にも通じていたといわれます。1916年、北シュエーランドに大農場を購入して多年苦心の結果、その経営に成功し、養鶏事業にも成功していました。

大正12年(1923)7月10日、モーテン・ラーセン(33歳)は、妻リーモア(32歳)、長男ポール(8歳)、長女エテッド(6歳)の4人家族で助手のペダー・スヨンナゴー(25歳)と一緒に、デンマークを出発、ドイツハンブルク港より東亜汽船「アフリカ丸」で出帆して、大震災の影響が残る横浜を避けて、9月12日神戸港に入港、そして9月19日に真駒内種畜場に到着しています。

ラーセン一家は、種畜場の敷地内に北欧風の白い木造家屋を建て、畜舎を作り、農耕馬2頭、乳

牛6頭、豚20頭、鶏50羽を飼い、プラオ、カルチベーター、ハロー、ヘーレーキ、播種機、種子選別機などの機械を使って十五町歩の有畜混合農業を経営したといえます。この経営状況は真駒内の農家のモデルとなり、農事や家畜改善に大いに役立ったのでした。北海道大学でもそれまでの主穀農業とモーテン・ラーセンの主畜農業の違いを克明に記録しました。モーテン・ラーセンは働き者で、家族は4人。いつも大きなエプロンを掛けて太って体格の良い奥さんは親しみやすく、助手のスヨンナゴーも温厚質朴な青年であったといわれています。ラーセンは毎日、家畜の世話や農作業をし、スヨンナゴーも助手としてよく働いたそうです。夫人は午前10時ごろと午後にも畑へお茶やおやつを持って行ったようです。夕食後は、一家5人で場内を散歩する日課であったようです。労働と余暇のけじめがはっきりしていて、日曜日は安息日として必ず仕事を休み、2頭の馬にラーセンと妻リーモアがそれぞれ子供を一人ずつ乗せて、円山や琴似の方まで出かけたりしたということです。

近所の人たちは菜園や果樹園の作り方、農機具の使い方などを教わり、野菜や果物の種子をもらって自宅の畑に植え育てるなどの交流があったようです。こうして日本人に親しまれ、有畜農業による地力回復に成果をあげたモーテン・ラーセン一家ですが、5カ年の契約を少し残して、昭和2年(1927)11月末札幌を離れ、シベリヤ経由でデンマークへ帰りました。帰国後、酪農業をつづけていましたが、養鶏業の失敗などもあってか、カナダへ移住(1945?)したようで、モーテン・ラーセンの晩年についてはよくわかっていないようです。

また、助手のスヨンナゴー(1900~1963)は、帰国後ユトランド北部で酪農業を営んで、日本語ができることもあって、日本からの多くの研修生を受け入れるなど親日的であったそうです。野喜一郎、太田正治(八雲町)、黒澤西蔵、佐藤貢なども訪問しています。

その後真駒内地区は大きくかわり、現在は、「真駒内五輪記念公園」(緑町3丁目)の一角にある「ラーセン農場跡」の標識がわずかに往時を偲ばせています。

真駒内緑町3丁目、真駒内五輪記念公園にある標。  
真駒内種畜場内(現在の上町5丁目から緑町5丁目)にあった、デンマーク人のモーテン・ラーセンの農場跡。北海道第二期拓殖計画で畜産農業を推進するために、大正12年(1923)から5年間ラーセン一家が移住し、15ヘクタールの農場を開き北欧式有畜農業の実生活をモデル的に実証した所。  
この標は、真駒内連合町内会が平成11年(1999)に以前の標柱に変えて設置。

ラーセン農場跡



さて、ラーセンやフェンガーが滞在中の大正13年(1924)2月18日から1週間、北海道会議事堂で、一般農民を対象にした「デンマーク農業講演会」(北海道畜牛研究会主催)が開催された時には、二人も講師を依頼されて講演をしています。モーテン・ラーセンは、当時のデンマーク農業の協同組合による成功について話し、エミール・フェンガーは、収穫後の畑作について話しています。また、デンマーク農家の料理法の講習会なども開催されています。

モーテン・ラーセンの農場には、真駒内の北海道種畜場ということもあって、日本人の農業実習生もいました。その中で後に青年酪農家三澤正男氏(1904~1954)(後に道会議員となり、昭和29年9月15号台風の洞爺丸事故により急死。)は、ラーセン家と交遊のあったフリードリッヒ・コッホの次女ヘルタと結婚しています。一男四女があり、現在、長男三澤道男氏(道会議員を務めた)は八雲町で酪農業を営み、十勝清水でコッホが作ったパン焼き釜を家族で八雲町に移設し、日々使用して大切に保存しているということです。みなさんご家族健在とのこと。三澤家とドイツのコッホ家の親族は今も交流が続いているそうです。次女るみいさんは、丸山孝士夫人として千葉県佐倉市に在住。2001年には、機会を得て、ご家族でドイツのコッホの故郷を訪問した折、日本甜菜糖株式会社札幌支社のお世話により、フリードリッヒ・コッホが勤めていたクラインワンツレーベンの製糖会社も訪問して、日の丸の旗を掲げて歓迎してくれたことに感激を新たにされたそうです。このようにドイツのコッホ家とは今も交流が続いているそうです。

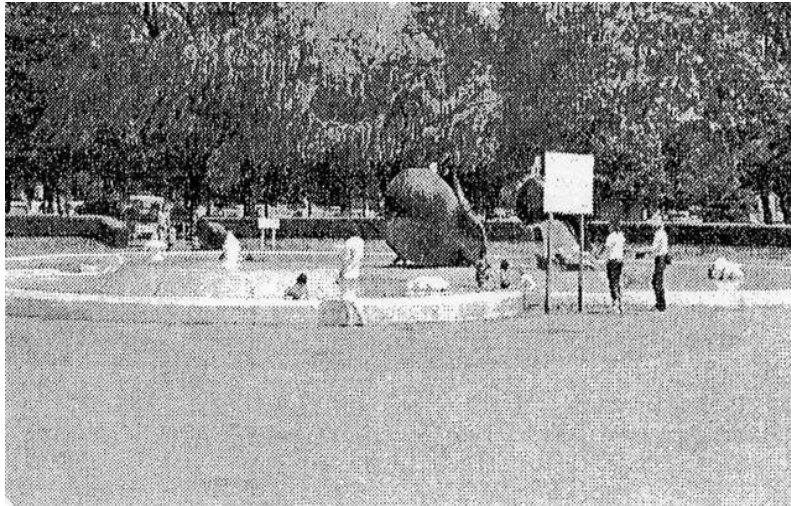
#### 北海道農事試験場(琴似村)の主畜農業五町歩農家のエミール・フェンガー

エミール・フェンガーは、明治27年(1894)生まれで、デンマーク最高のコペンハーゲンの国立農業獣医大学を大正7年(1919)に卒業していますが、なおこの間も含めて約7年間各種農場や農業研究所の実地経験も積んでいます。大正11年(1922)からノーズジョランド農業学校で教鞭を執りながら十町歩農場も経営していました。彼は英語もよくし、妻フリーダも1年半のイギリス遊学の経験があり英語をよく話したといわれ、北海道庁の模範農家としての招聘が決まりました。

大正12年(1923)8月14日、エミール・フェンガー(31歳)は、妻フリーダ(34歳)、長男フリッツ(5歳)、長女オウサ(3歳)の家族と一緒にデンマークを出発、ベルギーのアントワープ(アントウエルペン)経由で東亜汽船「チリー丸」に乗り、10月15日神戸入港、そして10月26日札幌琴似村の農事試験場に到着。五町歩の混合農業を営みました。

北海道庁は、プラオ、ハロー、カルチベーター、馬車(馬櫓)などの農機具をデンマークに注文し、また耕馬2頭、乳牛2頭(後に6頭)、豚3頭、鶏25羽なども手配しています。住宅、畜舎及び納屋などはフェンガー自身が設計してデンマーク風に連結したものを建てています。農業経営は、北欧風農機具を駆使した新しいやり方で、作物は主として飼料用の牧草、根菜、麦類、馬鈴薯、家畜ビートなどであったようです。普通の日課としては、例えば、朝、搾乳後、牧草地に牛を放牧して、畜舎を掃除したり、正午には、畜舎に入れて手入れをして休養させてから再び放牧し、夕刻畜舎に入れて搾乳を行うなどといった生活であったようです。フェンガーは、デンマーク農業参事会にも定期的に詳細な報告を書き送っています。フェンガーは、5カ年の契約が満了となり、昭和3年(1928)6月1日札幌を発ちましたが、その当日の出発数時間前まで、琴似の農事試験場での実地指導にあたるという熱心な人であったといわれます。約6カ月にわたり、アメリカ・カナダを視察後帰国。ノーズジョランド農業学校教師に復帰しています。

現在、札幌の琴似地区は大きく変り、フェンガーの「農事試験場」を記念するものはなにもなく、後の「北海道農事試験場」も、琴似発寒川沿いに「農試公園」<運動公園>として、わずかにその名残をとどめているにすぎません。



[ 札幌市西区の農事試験場跡—現在の農試公園（運動公園） ]

さて、エミール・フェンガーはその後、コリンズ農業会理事(1930～32)、小作経営(1932～35)、ライングビー農業学校教師(1931～41)、そしてノーズジョランド農業会教師のかたわら農業経営(1945～50)にあたっていました。昭和26年(1951)3月、フェンガー57歳の時に、日本政府農林省の招きで、4ヵ年契約で再び妻フリーダとともに来日しています。山形県新庄市の東北農業試験所(平成のフェンガー記念館)所属で、日本各地の講演や農場視察などでデンマーク農法の指導にあたっています。昭和29年(1954)9月、日本の酪農経営の発展に多大な功績を残して、契約満了で帰国しています。なお、昭和43年(1968)エミール・フェンガー氏寄贈の基金による「エミール・フェンガー賞」が設けられています。平成16年(2004)には、農業試験所(住宅・畜舎)は、「フェンガー記念館」として改修、資料なども保存されています。

#### 甜菜(ビート)作付を中心とした十勝地区の十町歩農家・・・コッホとグラバウ

製糖原料であるビート栽培の歴史は古く、北海道では明治初年開拓使の札幌官園での試作に始まりますが、ビート製糖業は、有珠郡西紋麓(にしもんべつ)の官営紋麓製糖所(明13)・晩成社依田勉三の「当縁農場」の甜菜工場などの努力も試作に止まり、その後、「北海道製糖工場」(大8)や「日本甜菜製糖清水工場」(大9)の進出によるビートの作付け指導から本格的な栽培が始まりました。しかし、ビートは連作がきかず、多肥を必要とすることもあり大規模な作付は困難でした。

そこで、道庁は、ビート農家の栽培技術の向上を目指して、甜菜作付を条件とする十勝の十町歩模範農家として、ドイツからフリードリッヒ・コッホとウィルヘルム・グラバウの二農家を招くこととしました。人件費以外の土地、住宅、家畜、畜舎、農業機械等の設備は、「北海道製糖株式会社」(大正8年・1919年設立、大正9年・1920年12月操業開始、現存するビート製糖工場としてわが国最古のもの)と明治製糖株式会社によって無償で提供されて、その他の費用(人件費等)は道庁が支出しています。人選については、ドイツのクラインワンツレーベン甜菜会社の推薦によってこの2農家の招聘が決まり、大正12年6月に5ヵ年契約の仮契約をしています。





〔十勝清水滞在当時のコッコの家族写真〕

＜後列左から＞

- 妻 ベルタ・コッコ
- 長女 エルナ・コッコ
- 次女 ヘルタ・コッコ
- フリードリッヒ・コッコ

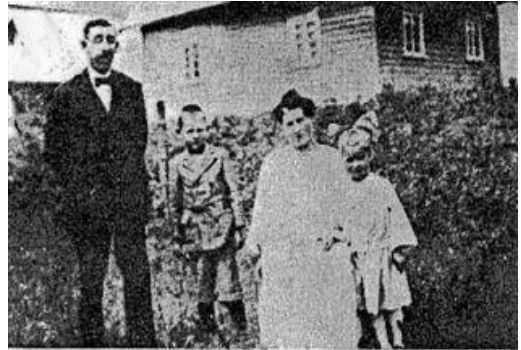
＜前列左から＞

- 次男 リヒャルト・コッコ
- 長男 オットー・コッコ

コッコの家族写真2枚は丸山のみい氏提供：上と下



コッコ滞在当時の住宅と家族の写真（下の写真と同じ家）

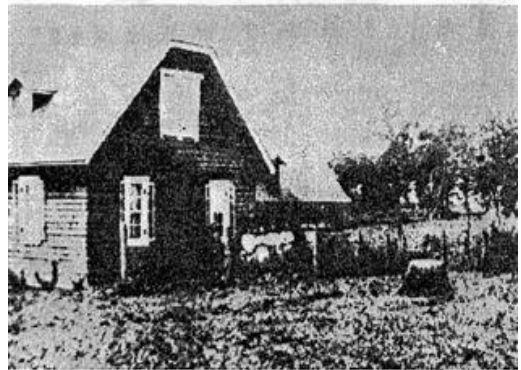


グラバウ一家（大正12年）



現在も使用されているコッコの住宅（2008年6月18日撮影）

＜写真提供—清水町教育委員会社会教育係長 安ヶ平宗重氏＞



グラバウの家（大正12年）

大正12年(1923)7月20日、コッコとグラバウの両家族一行10名は、北ドイツのロイド汽船「ウエザー号」で、ブレーメン港を出帆して、9月25日神戸に入港しています。そして、グラバウ家族は10月3日北海道製糖株式会社所有地（帯広）に、コッコ家族は10月4日明治製糖所牛機舎



社有地（十勝清水）にそれぞれ現地到着しています。2人とも十勝国において十町歩の甜菜栽培を主とした混合農業経営にあたります。両家族には、ドイツ式のプラオ、ハロー、耕作機、除草機、播種機、ローラー、刈取機、四輪馬車など、さらに耕馬2頭、乳牛3~4頭、豚3~5、鶏35羽などが提供されています。

フリードリッヒ・コッホ（43歳）は、妻ベルタ（43歳）、長男オットー（20歳）、次男リヒャルト（18歳）、長女エルナ（16歳）、次女ヘルタ（15歳）の6人家族。コッホは小学校卒業後、ノラベッツエーク・ウント・ケゼック製糖会社の甜菜部に勤務して、ビート栽培技術者として会社でも高い評価を得ていました。（第一次世界大戦従軍、言語はドイツ語のみ）

コッホと息子2人の3人が主として甜菜の農業経営にあたり、輪作携帯の技術指導をしました。妻と娘2人は家事の処理を担当したようです。住宅・畜舎は、ドイツ農家の設計図を参考にして建てられた2階建（24坪）の立派なものでした。また、畜舎は40坪（7舎）、豚舎5坪、倉庫も40坪という広さでした。

コッホは、十勝での農業経営に情熱と誇りを持ってあたり、その営農の独創性は地元の農民にも大きな影響を与えたといわれます。またコッホは、北海道十勝の生活になじんで、契約期限を2カ年延長して、結局、十勝清水に8年いたそうで、その住宅は、現在も保存されているそうです。

昭和5年（1930）11月、札幌で行われた青年酪農家三澤正男氏と次女ヘルタの結婚式を家族全員で見届けて、同年（1930）12月2日、正男・ヘルタに見送られて、家族とともに横浜から帰国しました。

ウィルヘルム・グラバウ（30歳）は、妻マリヤ（35歳）、長男ウイルヘルム（7歳）、長女シャルティ（5歳）の4人家族。グラバウも小学校卒業後、同じ製糖会社に入社。甜菜の耕作に従事していました。（第一次世界大戦従軍、言語はドイツ語のみ）

グラバウ一家の住宅は、2階建で21坪あり、畜舎・納舎は78坪（6舎）、他に豚舎及び農機具置場15坪という大きな立派なものが提供されています。グラバウは、製糖工場の工員出身で、その営農技術はさほどではなかったようですが、農民であることに強い誇りを持っていた点で、卑屈になりがちな農民に好刺激を与えたといわれます。グラバウは、昭和3年（1928）秋に帰国しています。

作物は、コッホの場合もグラバウの場合もともに、やはり甜菜作付中心とする「混同農業経営」で、他に家畜ビート、家畜人参、燕麦、麦類、トウモロコシ、豆類、馬鈴薯、クローバーなどを栽培していたようです。

その後のコッホ家と三澤家の交流の思い出（千葉県佐倉市在住 丸山るみい氏 談）

私どもの両親（三澤正男・ヘルタ）は、「昭和5年に、帰国するコッホの家族を横浜港まで見送りに行ったのが私たちの新婚旅行だった」と言っておりました。そして第二次大戦、戦後の東西ドイツの分断、フリードリッヒ・コッホの死、東ドイツとなったコッホの家族とは文通さえも困難な状態が続きましたが、昭和28年（1953）、デンマーク・コペンハーゲンで開催された世界酪農会議に父三澤正男が日本代表団の一員として出席することとなり、それまでかなわなかった母ヘルタの里帰りを期して、二人揃って出かけました。しかし、東ドイツとなった故郷の土を踏むことはできず、ベルリンでの限られた48時間の再会となりました。すでに他界していたフリードリッヒ・コッホを除き、母親ヘルタをはじめ12人の家族全員との23年ぶりの再会でした。今は亡き父がこの感激的な再会の様子を何度も何度も話してくれましたのも、懐かしい思い出です。その翌年、昭和29年（1954）9月の洞爺丸台風事故で、洞爺丸に乗船していた父を私どもは失いました。故郷をこの目で見たい、その土を踏みたいと思いつける母ヘルタの里帰りを願う三澤家に、幸いにもその機会が訪れます。昭和58年（1983）11月、当時北海道ホルスタイン農業協同組合の理事・組合長をしていた三澤道男は、ドイツホルスタイン協会及びドイツ人工受精所の招きで、母ヘルタ同伴で訪独。その際、ドイツ側での、ヘルタの故郷訪問実現の努力にもかかわらず、またも、東独にあった故郷への里帰りはかかないませんでした。夫の死、かなわぬ再度の里帰り、失意に沈んだ母ヘルタはその後多くを語ることはありませんでした。でも私の記憶にある両親は、いつもフリードリッヒ・コッホが北海道で果たした業績を誇りとしていたことを知っております。

<参考文献及び参考資料>

- ・ 外人農家概況（第一次・大13、4）（第一次訂正増補版・大14、10）（第一次訂正版三版・昭2、7）  
（第二次・昭2、8） 北海道庁産業部作成（道立文書館所蔵）
- ・ 外人農家の農業経営法（昭和3、7） 北海道庁産業部作成（道立文書館所蔵）
- ・ 札幌市総務局行政部 文化資料室 郷土史相談室資料（今倉 迪夫氏提供）
- ・ 「清水町史」（コッホについて） ・ 「大正村史」（グラバウについて）
- ・ 郷土研究誌「らんぷ」第3号 ・ 「帯広市史」昭和59年版
- ・ 「写真集ふるさとの思い出11・帯広」 国書刊行会
- ・ 帯広百年記念館資料（学芸研究員 作間 勝彦氏提供）
- ・ 復刻版「北海道に於ける独逸人経営の模範農家」（吉村真雄）<「農業世界」昭和3年新年号・2月号>
- ・ 論文「大正時代北海道のデンマーク模範農家招聘について」（北海道東海大学助教授 佐保 吉一氏）
- ・ 「真駒内物語」（谷代 久恵著） 北海道新聞社刊
- ・ 千葉県佐倉市在住 丸山 るみい氏（フリードリッヒ・コッホの孫娘）から、いろいろ資料・写真提供とご教示をいただきました。近年、丸山るみい氏にドイツの著者から寄贈された次の研究文献があるそうです。『前世紀初頭におけるクラインワンツレーベン製糖工場による甜菜栽培の日本での進展』（原題省略）（エルハルト・ユンクハンス著）＝内容はコッホ及びグラバウの日本における甜菜栽培の指導の開始から離日に至るまでの詳細な記録・写真＝（丸山るみい氏所蔵）
- ・ その他インターネット資料など

## 屯田兵育ての父・北海道を愛した永山武四郎の生涯 —屯田事務局長・第二代北海道庁長官・陸軍第七師団長・貴族院議員を歴任—

### ■まえがき

1869年(明治2年)7月、明治政府は開拓使を設置して、北海道近代化の開拓事業を推進するために各分野にわたり諸外国の先進技術・文化の専門家78名を招いています。

1871年(明治4年)7月、開拓使顧問として米国農務省長官ホーレス・ケブロン(1804-1885)を招き、続いて1873年(明治6年)1月、地質測量のベンジャミン・S・ライマン(1835-1920)、そして同年7月、農業牧畜のエドウィン・ダン(1858-1931)、さらに1976年(明治9年)7月、高等教育のウィリアム・S・クラーク(1826-1886)などを迎えて、その優れた指導力のもとにいろいろな開拓事業を進め、また「札幌農学校」を開校(明治9年8月)したのでした。彼らは総じて勤勉で、非常に熱心に仕事に取り組み、北海道開拓期の立派な指導者でした。

さて、江戸中期からのロシアの南下政策でロシア船の寄港・上陸が相次いでおり、日露の緊張は、明治政府にとっても脅威でした。これに対し、当時の北海道は、大国ロシアに対する軍備の強化が急務とされていました。この北方警備と開墾に従事させる「屯田制」を北海道に実施するという考えは、明治初年からあったようですが、1870年(明治3年)の開拓使の提案、次いで西郷隆盛が士族による北方警備と開拓を主唱、さらに陸軍大尉永山武四郎の進言を受けて、黒田清隆開拓次官が、1873年(明治6年)11月に太政官に屯田制を建議し、翌1874年(明治7年)に「屯田兵例則」が決定したのでした。開拓使は、ホーレス・ケブロンの助言により最初の入植地を「琴似」と定めて、すぐに兵屋208戸・中隊本部・練兵場・授産所などの兵村を建設しました。そして、翌年1875年(明治8年)5月、屯田兵・家族965人の第一陣が入植しています。以後、北海道には、各地に37の兵村ができ、合計約4万人が入植しています。<1904年(明治37年)屯田兵制度廃止。明治15年2月開拓使廃止に伴って、屯田兵の管轄は開拓使から陸軍省に移されます。>

永山武四郎(1837-1904)は、1872年(明治5年)9月から開拓使出仕。1875年(明治8年)3月、屯田事務局付となり、以後、札幌・旭川など各地の屯田兵制の創設に力を尽くし、「屯田兵育ての父」といわれています。今回は、屯田事務局長・第二代北海道庁長官・陸軍第七師団長・貴族院議員などを歴任し、北海道を愛した「永山武四郎」の生涯とその業績に光を当ててみたいと思います。

### ■永山武四郎の生立ちと屯田兵の開始

永山武四郎は、1837年(天保8年4月24日)5月28日、薩摩藩士永山清左衛門の4男として、鹿児島郡西田村(現鹿児島市)に生まれています。のち同姓喜八郎の養子となり、幼いときから剣術を藩の指南番大山某に学び、槍術を梅田九衛門について学んだといわれます。当時、多くの薩摩・長州の志士が、幕末から維新にかけて勤皇討幕など先鋭的な政治活動を行ったのに対して、武四郎は、1868年(慶応4年)戊辰の役で、藩軍にしたがって明治新政府軍の一人として会津の攻略に出陣したのが彼の新しい時代の始まりとなったのでした。32歳の武四郎は、初陣ながらよく

奮戦し軍の先鋒となって若松城下に攻め入り勇名をとどろかしたといわれます。

明治新政府の重臣の中には、同じ薩摩藩出身者としては、長老格の西郷隆盛(10歳年上)、黒田清隆(3歳年下)、岩村通俊(3歳年下)、伊藤博文(4歳年下)などがいますが、武四郎は誠実、実直型で、根っからの軍人魂を貫き、1871年(明治4年)3月陸軍大尉となり、御親兵(後の近衛師団)の小隊長に任ぜられています。当時、明治政府の陸軍兵制採用について、イギリス式とフランス式の二派の議論があり、イギリス式を主張していた薩摩藩出身者は激論にやぶれて失意に陥ります。武四郎も一時はその職を辞する決意をします。

この頃、北海道は大国ロシアの南下政策の脅威に脅かされていました。それにたいして北門の防御体制は函建砲台にわずかの守備隊がおかれているにすぎない状況でした。かねてから北方の防備の必要性を主張していた武四郎は、心機一転、北海道の開拓と北方の防備にあたる決心をしたといわれています。武四郎は、1872年(明治5年)9月15日、近衛師団陸軍大尉・開拓使八等出仕として札幌に着任しました。

屯田制を北海道に実施するという考えは、早くから、北方警備と開拓に従事する困窮士族対策として各方面で考えられていました。最初は、1870年(明治3年)開拓使提案、次いで、西郷隆盛の提唱がありました。1873年(明治6年)10月、武四郎を中心とした開拓使中堅幹部らが、黒田清隆に対し屯田兵制度の創設を進言し、また11月には岩倉右大臣たいしても同様の建言をしました。こうした開拓使たちの熱意を受けて、同年12月に黒田清隆の建言となって政府に受け入れられます。

翌年(明治7年)6月、開拓次官黒田清隆は陸軍中尉・屯田兵憲兵事務総理兼任となり、開拓使と陸軍省の両方の予算と権限を持ち、北海道に君臨することとなりました。また、武四郎はこの新設された屯田兵事務局に配属されて準備計画にあたります。同年10月30日「屯田兵例則」が決定、正式に発足しました。その後、武四郎は、約30年間、屯田兵の指導・北海道の開発と北辺の防備に専念することとなります。

屯田兵村の設置場所の選定については、安政年間の松浦武四郎の探検調査や西郷隆盛の命を受けて調査した桐野利明の琴似を適地とする報告もありましたが、開拓使は、小樽、石狩、千歳方面にその適地をさがしていました。また松本十郎大判官の月寒を適地とする意見もありましたが、最終的には、開拓使顧問ホーレス・ケプロンの進言により、最初の入植地を札幌郡琴似村と定めて、早速208戸の兵村の建設に着手します。この琴似屯田兵屋の設計についても、ケプロンの意見により当初の2軒長屋が1戸建てとなったといわれます。しかし、ケプロン主張のストーブ・壁天井の白土壁などは採用されず、建坪も17,5坪となりました。住宅地は1戸あたり150坪でした。

この兵屋建設は、開拓使東京出張所出仕の、後にサッポロビール生みの親となる村橋久成(1842-92)が開拓使官吏として1874年(明治7年)4月11日来札し、具体的な区画割・地積測量の任にあたっています。

琴似屯田兵村(屯田兵第1大隊第1中隊)は、週番所(中隊本部)、練兵場、授産所、墓地などの中心施設を南側に集め、その北側に計208戸の兵屋を密集させて、周囲に1戸あたり5,000坪の農地を配置したものでした。さらに、大砲(ガットリング砲)4門、小銃(エンピール銃)1,600丁をアメリカから買い入れています。

1875年(明治8年)1月、戊辰戦争で新政府軍(官軍)との戦いに敗れた宮城・青森・坂田(山形)3県と旧館藩(元の松前藩)の士族のなかから志願者を募り、5月に屯田兵・家族965人の第一陣が入地しています。続いて翌年には山鼻兵村(240戸、1,114人)と発寒兵村(320戸)に入地。発寒兵村は琴似兵村とともに第1中隊。山鼻兵村が第2中隊で、合わせて第1大隊編成とされました。続いて、明治11・14・1719年江別兵村(220戸)、明治18・19年野幌兵村(225戸)、明治20・21年新琴似兵村220戸、明治22年篠路兵村(220戸)などに旧士族らが入地して、道央地区の開墾が進められていきます。

#### ■西南戦争と屯田兵の出征

1879年(明治10年)征韓論に敗れた西郷隆盛が故郷の鹿児島に帰り、反政府軍を率いて北上します。この「西南戦争」最大の戦場は政府軍が守る熊本城の攻防となり、田原坂の激戦で政府軍が西郷軍を撃破したことで帰趨が決します。西郷軍が鹿児島を出発したのが2月15日。田原坂の戦いが3月20日、以後西郷軍は鹿児島まで後退を続け、9月24日西郷隆盛が城山で自刃して「西南戦争」は終了します。

この「西南戦争」に屯田兵も政府軍の一翼として出征しました。これを指揮したのが、准陸軍大佐堀基と准陸軍少佐永山武四郎(40歳)でした。西郷隆盛は薩摩藩の大先輩であり、また屯田兵の構想を最初に企画・推進した最も尊敬すべき人物であり、この出征により武四郎は、最大の苦境にたちます。しかし、大義のために、堀大佐とともに、琴似・山鼻両兵村の屯田兵で第一大隊を編成して、4月9日小樽港から熊本県下に出動しました。別働隊第二旅団に編成され、人吉の戦闘に参加して西郷軍を撃ち破り、「百姓部隊」と蔑視されていた屯田兵の勇名をとどろかしたといわれます。

第一大隊は戦局の決した8月30日東京に戻り、皇居で天皇陛下から親しくご慰労の言葉を賜っています。戦死者8名は、東京招魂社(靖国神社)に合祀されているといわれます。その後、第一大隊は、「ガットリング砲」5門・実弾10万発などを受け取り、9月30日札幌に凱旋しました。

<翌11年7月、札幌偕楽園に「屯田兵招魂之碑」建立、西南戦争出征戦没者8人・病没者28人の英霊を祀りました。その後、明治42年2月中島公園内に移設、さらに昭和9年6月、札幌護国神社に移設されています。>

永山武四郎は、この年12月、陸軍中佐に任じられ、さらに翌1878年(明治11年)12月、屯田兵事務局長となって、その軍務を双肩に担うこととなります。この頃、札幌(北2東6、)に私邸(現永山記念公園内「永山武四郎邸」)を建築しています。<明治13年ころの完成と推測されており、和洋折衷の貴重な歴史的建造物です。北海道有形文化財に指定されています。>

#### ■永山兵村の発展

1879年(明治12年)5月から約1ヶ月間、武四郎はロシアに出張しています。シベリア、樺太などのコサック騎兵隊の兵屋の構造や防寒の方策などを調査して帰り、その後の屯田兵屋の建築に利用したようです。

岩村通俊(1840-1915)は、開拓使判官時代、時の開拓次官黒田清隆と意見が合わず、1873年(明治6年)開拓使を去りますが、1882年(明治15年)会計検査院長として来道し、三県(函館・札幌・根室)巡視後に、北海道開発推進のためには、もっと本州からの移住を促進すべきであることと、上川の地に、京都・東京にならぶ「北京」設置の構想を政府に建言しています。その後1885年(明治18)に再び来道、屯田兵本部長永山武四郎らと共に上川の国見をして、再度、上川地区への「北京」設置の構想を政府に建言します。

北海道の三県分割には、かねてきびしい批判もあり、政府は、1886年(明治19年)、全道統一的な行政機関として、「北海道庁」を設置することとなり、岩村通俊が初代長官に就任します。岩村は、新たな開発政策の一つとして上川開発事業を進めます。まず、樺戸集治監の労働力により、市来知(現三笠市)から忠別太(現旭川市)までの開削がなされ、さらに樺戸・空知の両集治監が分担して、改修工事を行い「上川道路」が、1890年(明治23年)に完成します。そして、永山村・神居村・旭川村が成立しています。



旭川市常盤公園の永山武四郎の像(昭和42年・北村西望作)

<「永山村」の名は、永山武四郎の功績を認められた明治天皇のご意思による命名といわれます。>

1888年(明治21年)、上川屯田の設置が決まり、明24永山地区2兵村・明25東旭川地区2兵村・明26当麻地区2兵村に、本州各地から一兵村200戸・合計1,200戸が移住。この上川屯田は、従来の困窮武士を対象とする「士族屯田」から一般農民も応募できる「平民屯田」に切り替えた最初のものといわれます。これらの給与地は肥沃な土地と入地者の努力もあって次第に発展しますが、なかでも、永山地区は岩村通俊・永山武四郎による用水路・水田計画などの基盤整備もあって急激な発展をみました。

永山武四郎は、第2代北海道庁長官(明21,6～明24,6)となり、岩村の意図を受け継いで、上川への北の帝都「北京」設定を働きかけますが退けられ、変って政府は「離宮」の上川設置を決定しています。道庁は早速、現地調査をして、離宮予定地をナエオサニ(現神楽岡)とし、この地一帯を御料地としたのですが、結局、札幌・小樽地区の反発と日清戦争の始まりによって頓挫し、離宮の建設は実現しませんでした。上川神社境内には、武四郎の歌碑と「上川離宮予定地」の記念碑が建立されています。

この間、永山武四郎は、本道の開拓・産業の振興に力を尽くし、次々と屯田兵村が誕生することになります。明治20年代の永山武四郎は、屯田兵本部長・北海道庁長官・そして第7師団長となり常に最高責任者として全力投球した時期でした。

#### ■北海道を愛した武四郎

武四郎は、1885年(明治28年)、日清戦争に出征するため屯田兵を率いて出発しましたが、東京で終戦をむかえています。その翌年、1896年(明29年)第7師団創設に伴い、師団長になって、1900年(明治33年)まで努めました。軍を退役した後、1903年(明治36年)11月、貴族院議員に勅撰されますが、翌明37年3月帝国議会出席のため上京中病にたおれ、食道ガンのため5月27日夜、67歳の生涯を閉じました。北海道の土になるという本人の遺志により、棺に入れられた遺体は上野駅から列車で札幌へ移され、自邸に安置されました。葬儀は6月2日、神式で盛大に行われ、儀仗兵一個大隊が肅然と大礼服に覆われた棺を守ったといわれます。永山邸から豊平橋までの沿道は会葬者の人垣で埋め尽くされたということです。武四郎の生前の意志により、旧豊平墓地に埋葬されましたが、1982年(昭和57年)、里塚霊園に改葬されています。

永山武四郎は、旭川の永山神社に祀られ、また、旭川神社・北海道神宮末社の開拓神社にも合祀されています。

<主な参考文献及び参考資料>

- ・「開拓使時代」(さっぽろ文庫 50) ・「屯田兵」(さっぽろ文庫 33) ・「琴似屯田百年史」(琴似屯田百年記念事業期成会) ・「琴似屯田歴史館資料室」展示配布資料 ・「ほっかいどう百年物語」STV ラジオ編 中西出版
- ・「よみがえった『永山邸』-屯田兵の父永山武四郎の実像-」 高安正明著 共同文化社
- ・「開拓につくした人びと第3巻」北海道総務部文書課編集 理論社刊
- ・「目で見ると旭川の歩み」(開基 100 年記念誌・旭川市)
- ・「北海道の歴史」榎本守恵著 北海道新聞社
- ・インターネット資料、他